



Title	東南アジアのラーマーヤナ(4) : 雲南省傣族の蘭嘎西賀
Author(s)	大野, 徹
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1996, 6, p. 211-264
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99728
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東南アジアのラーマーヤナ（4） －雲南省傣族の蘭嘎西賀－

大 野 徹*

はじめに

中国雲南省に住むタイ（傣）族の間に傣語版のラーマー物語が存在している事実が明らかになったのは、その漢語訳「蘭嘎西賀」の刊行（1981年）による。我が国では岩本裕氏（東洋文庫376,441）によって初めてその内容が紹介され、宇戸清治氏（東京外国语大学）の論文によってタイ（Thai）語訳本も存在する事が明らかにされた。

本稿では1981年に雲南人民出版社から出版された楊仲祿責任編輯『蘭嘎西賀（傣族神話叙事長詩）』（237頁）を基にその内容を紹介すると共に、「蘭嘎西賀」と東南アジア諸語版ラーマ物語との間に見られる共通点、相違点、特徴などについて考察する。

「蘭嘎西賀」（ランカ・シホ）は、タイ（傣）語で「ランカーの十頭」と言う意味である。題名からも推測されるように、この物語は主人公はラーマ王子ではなく十個の頭を持つランカーの支配者すなわちラーヴァナである。ラーヴァナはここでは捧瑪加（ブンマチャ）と呼ばれる。ラオスのムオンシン版ラーマーヤナ「パラク・パラム・ポンマチャク」に登場するポンマチャク（Brahma Cakra）と同じ名称である。基本的構成もムオンシン版ラーマーヤナと変わりない。しかし、同じラオス版ラーマーヤナであるヴィエンチアンの「パラク・パラム」や「グヴァイ・ドヴォラビ」とはかなり異なる。むしろ、タイ版ラーマーヤナやマレーシア版ラーマーヤナには無い独特のエピソードを共有している点から言うと、

*大野 徹：大阪外国语大学 地域文化学科 アジアⅡ講座教授、ビルマ語。

OHO Toru is Professor of Burmese, Osaka University of Foreign Studies.

「蘭嘎西賀」の構成は基本的にはビルマ版ラーマーヤナと同じだと言ってよい。それほどよく似ている事実から推察すると、「蘭嘎西賀」とビルマ版ラーマーヤナとの間には何からの密接な交流関係が存在していた可能性が考えられる。

I 蘭嘎西賀の梗概

蘭嘎（ランカー）と言う美しい島があった。島の支配者の名前は「叭蘭巴」（パ・ランバ）、妃の名前は「南安嘎嫡」（ナン・アンカティ）。子供に恵まれない二人は、天神に子宝を祈願する。妃が懷妊。生れた王女は「古蒂提拉」（クティティラ）と命名される。

国王は16歳になった古蒂提拉に婿を迎える事を考える。王女はそれを拒否、深夜王宮を抜け出て伊麻板（イマパン=ヒマラヤ）の森に入る。古蒂提拉は隠者（パラ西）の下で、仏法を重んじ修行を重ねる。7ヶ月が経過。彼女の敬虔な姿に感心した「叭英」（パ・イン←プラ・インドラ=帝釈天）が、天界の最高神である「瑪哈捧」（マハー・パン←マハー・プラフマー=大梵天王）に、古蒂提拉と交わって蘭嘎の後継者を生ませるよう願い出る。下界に降臨した瑪哈捧に、古蒂提拉は芳香を放つマンゴーを10個差し上げる。次いで洗い忘れた象牙マンゴーを、最後に金色のマンゴーを差し上げる。瑪哈捧は王女の腹を三回撫で、汝は男児に恵まれるであろうと述べて立ち去る。

10か月後、古蒂提拉は男児を出産。第一子は中央に4個、両肩の上に3個ずつ、合計十個の頭をもつ奇怪な嬰児であった。隠者はその子の父親が瑪哈捧であることから「捧瑪加」（パンマチア←プラフマー・チャクラ=梵天法輪）と命名。カラスのように黒く、恐ろしい形相をした第二子は「姫納帕」（クンナバ←クンバカルナ）と命名され、健康で雅やかな第三子は「彼亜沙」（ピヤシャ←ヴィビーシャナ）と命名される。

成長した子供三人は、父親に会いたがる。自分たちの父親は誰なのか。生きているのか死んでしまったのか。生きているのなら今どこに居るのか。母親はそれまでの経過を語る。そなた達の父親は瑪哈捧。天神である。そなた達も母と同じように敬虔な修行を積めば、そしてその誠意が父親に通じれば、面会に訪れてくれるだろう。

母親の説明を聞いた子供達は、修行に励む。5年後、子供達の心に感動した父親瑪哈捧が森の中に降臨。天神は子供達の望みをかなえてやる。捧瑪加には、神通力と不死身とが約束される。但し、正義を実現するためこの世に生まれてくる王子、神弓「阿沙尖」(アシャチエン)、人間の良き友たる白猿の三つには神通力も不死身も通用しない。故に、この三つには絶対に対抗してはならぬ。違反すれば身の破滅を招く。そう忠告した後、瑪哈捧は、天下無敵の神弓で、捧瑪加の生命がその弦に宿っている「賽宰弓」(サイツアイコン)を捧瑪加に与える。次男の姿納帕には本人の希望どおり12年間の睡眠と百発百中の武器で魔を下し妖を殺す絶大な殺傷力を有する神の手裏剣とを授ける。但し、神の手裏剣は、腐臭に逢えば効力を失う。よって、死体や贓物に触れてはならぬ。生臭い臭いや唾も禁物である。第三子の彼亜沙には天の書物と神筆とを与え、高度の知識を授ける。

捧瑪加は14歳、姿納帕は13歳、彼亜沙は12歳に成長。捧瑪加は祖父の叭蘭巴に蘭嘎の王位を要求する。孫の存在を知った叭蘭巴は捧瑪加に王位譲渡を決意する。戴冠式典が挙行され、16歳になった捧瑪加が蘭嘎の国王に即位する。

新国王の妃には、魔王「叭千塔」(バ・カンタ)の娘「南蘇婉妃」(ナン・スワンニ)が迎えられる。淫蕩な捧瑪加は王妃一人に満足できない。龍王の娘「南蘇甘塔」(ナン・スカンタ)を見初めて第二王妃に、納嘎国王の娘「南曼達」(ナン・マンタ)を口説いて第三王妃に迎える。王妃3人は王子を出産する。南蘇甘塔の子は米下(ミカ←メーガナタ)、南曼達の子は菲瑪蘭敢(フェイマランカン)、南蘇婉妃の子には歪亞拉(ワイヤラ)と命名される。

もと天の神であったが、飲酒酩酊して天界の平穏を乱したため、叭英によって海底の埃森龍(アイセンロン)に追放された龍王「巴拉麻」(パラマ)は、叭英の仕打ちを恨み、兵を率いて天界に攻め入る。叭英が天兵を指揮して迎撃する。熾烈な戦闘が展開されるが、7か月経っても決着がつかない。龍王は女婿捧瑪加に応援を要請する。捧瑪加は米下に大軍を与えて天界に差し向ける。天帝瑪哈捧の神權を笠に傍若無人に振舞う米下に反撃を加えれば、十頭王を怒らせ天界に一層の災厄がもたらされると考えた叭英は、もう一層上の天界に撤退する。龍王と米下の部隊は天宮に入城、叭英の玉座を占領して喚声を挙げる。7か月後、二人は満足して下界に戻る。捧瑪加は米下に領地を半分分け与え、英達西達(インタ

シタ←インドラジット）と命名して攝政に任じる。

伊麻板地方に納里本（ナリブン）と言う人間の形をした樹木がある。その樹下で「南西拉」（ナン・シーラ=シーター）と言う美しい娘が修行をしている。南西拉を見初めた捧瑪加が、口説く。南西拉は拒む。捧瑪加、西拉の手を握る。西拉は、天界へ、更に竜の国へと逃避する。捧瑪加は、飛車で追跡する。疲労困憊し身を隠す所が無い事を悟った南西拉は、捧瑪加を呪詛して火中に飛び込む。西拉の体は炎上し、灰となる。捧瑪加、天神地祇を呼び寄せ「南西拉が復活再生することあらば、捕えて直ちに報告せよ」と命じる。

飛車に乗った捧瑪加、塔巴塔那（タバタナ）山の上空を通過する。森林の中で一匹の白猿が、昇る太陽に合掌礼拝している。基沙（チシャ←キシュキンダ）国の猿王「巴力模」（パリモ←ヴァーリ）である。雲の隙間から下界を覗き見た捧瑪加、河の中で沐浴しているもう一匹の白猿を目撃する。他人の女房の行水姿を覗き見するとは怪しからんと、巴力模が憤慨する。木に攀登り、穴に潜り込むような輩にも羞恥心はあるのかと捧瑪加、せせら笑う。傍若無人な放言に、巴力模、烈風の如き速さで一気に15約（由旬）も上昇し、捧瑪加を掴まえてその頭を締め上げ、勢いよく振り回す。失神し掛けた十頭王、巴力模に許しを乞う。

十頭魔王の好色淫乱振りが激化し、被害者が続出、怨嗟の声が津々浦々に溢れる。蘭嘎の守護神が叭英に窮状を訴える。叭英は瑪哈捧に捧瑪加の行状を訴える。超能力は付与してあるものの、正義の王子と神聖な弓、森林の白猿の三種に対しでは無効にしてあるとの説明を受けた叭英、諸天と協議して捧瑪加の征伐を決意する。

沓達臘塔国（タタラタ←ダシャラタ）の「沓達臘塔」（タタラタ←ダシャラタ）王と天界の叭英は盟友の間柄。龍王の攻撃を被った叭英を沓達臘塔が救援する。龍王に襲われた沓達臘塔は、身を躰したものの、左手の小指を負傷する。戦闘が終り、敗れた龍王は海中に逃避する。感謝の印に叭英から一張りの弩と神の矢3本とを贈られた沓達臘塔は、下界に戻る。

沓達臘塔王には、三人の王妃がいる。正妃の名は「南蘇甘嫡」（ナン・スカンティ）、第二妃は「南蘇米達」（ナン・タミタ←スミトラー）、第三妃は「南洁西」（ナン・チエシ←カイケーイー）と言う。嗣子はない。沓達臘塔の負傷を知つ

た第三妃の南洁西は、国王の就寝時に負傷した小指を口の中に銜えて、両親に教わった刀傷、矢傷の治療法を施す。3日後傷口に痂ができる、刀傷は平癒する。国王は喜び、汝に男児が生れたらその子を後継者にしようと南洁西に約束する。

国王は叭英に貰った弩を携えて狩猟に出掛ける。伊麻板の森で一頭の鹿を目撃する。国王は神弓を取り上げ、水辺で水を飲んでいる鹿に矢を射る。川辺から叫び声が挙がる。駆け寄ると袈裟を纏った帕拉西（パラシ＝隠者、修行者）が血溜りの中で呻いている。国王は身元を明かし、そなたを鹿だと誤認して矢を射たと正直に謝まり、供の者に命じて隠者を庵まで運び、薬草を使って熱心に矢傷を手当てる。治療の甲斐あって、隠者の矢傷は完治する。国王の誠意に感心した隠者は、何か手助けする事があればと尋ねる。国王は、自分には嗣子が居ない。男子の授かり方を知りたいと述べる。隠者はこれを王妃に食べさせようとバナナを2本渡す。王宮に戻った沓達臘塔は、正妃の南蘇甘嫡と第三妃の南洁西とにバナナを1本ずつ渡す。二人は、第二妃南蘇米達に半分ずつ分け与える。

やがて王妃3人が懷妊、出産する。帕麻納（パマナ＝司祭）は、第一妃が生んだ子に「召朗瑪」（チャオ・ランマ←ラーマ）、第三妃が生んだ子には「帕臘達」（パラタ←パラタ）、第二妃が生んだ双生児には「臘嘎納」（ラカナ←ラクシュマナ）と「沙達魯嘎」（シャタルカ←シャトルゲナ）と命名する。

伊麻板の森で修行中の隠者の庵にカラスの群が飛来、隠者の外出を見計らっては供え物を食い荒らす。抜け落ちたカラスの羽と糞尿とで庵の中は足の踏み場もない。さすがの隠者も腹を立てる。不届き者のカラスを追払うため、隠者は、召朗瑪の手伝いを沓達臘塔王に申し入れる。弓塔弩と神矢3本を携えて隠者に同行した召朗瑪は、無駄な殺生を避けるため的を外して矢を射る。大地を震撼させる神の矢音に、カラスの群は一斉に逃避する。しかし神の矢は、どこまで逃げてもカラスを追い掛けて来る。カラスの群は平謝りに謝り矢を回収してくれるよう召朗瑪に懇願する。召朗瑪は、カラス達の行為を戒めて矢を回収する。

一旦は焼け焦げた伊麻板の納里本の木が春になって新芽を出す。樹下で焼死した南西拉も再生、成長する。天神地祇に報告を受けた十頭魔王の捧瑪加は、我が身に掛けられた呪詛を思い出し、南西拉の抹殺を指示する。捧瑪加は、南西拉を眠らせ、金粉油漆の棺に入れて川に流せと命じる。嬰児は波に翻弄されて溺死す

るに違いない。

子供に恵まれない甘納嘎（カンナカ←ジャナカ）国の国王夫妻は、神仏に後継者の誕生を祈願する。隠者に指示された国王が、河辺に赴くと、川上から棺が流れて来る。内部から閃光を発している棺を引上げ蓋を開けると、幼女が熟睡している。国王は幼女を抱き上げ、養女として育てる。国王は姫3人を妃の遊び相手として、同居させる。

16歳に成長した妃南西拉の美しさが四方に伝わる。各国の王子達が求婚に殺到する。甘納嘎国王に協力を求められた叭英は、下界に降臨して神聖な弓「阿沙尖」と神の矢3本を国王に渡す。国王は、神授の弓で矢を射る事が出来た者に姫を嫁がせる旨公布する。

腕自慢の王子たちが次々と挑戦するが、誰も成功しない。捧瑪加も参加する。捧瑪加は象18頭に匹敵する大力の持主だが、弓は辛うじて地を離れただけである。再度の挑戦でやっと胸元まで弓を持ち上げた得たものの矢を番える事はできない。

召朗瑪を伴った隠者が甘納嘎に到着する。弓が置かれた高台に召朗瑪が登場する。颯爽とした召朗瑪の姿を望楼から見ていた南西拉は、この若者こそ理想の夫君だと直感する。南西拉は、朗瑪に助力するよう神々に祈祷する。召朗瑪も姫君との間に本当に縁があるのなら、我を佑けよと天神に祈祷する。持ち上げた召朗瑪の手の中で、神弓は軽く弦は柔らかである。召朗瑪は神弓を軽々と引き、神の矢3本を射る。矢は大地を震撼させ、雲を突き抜けて青空の彼方へと消え去る。

今矢を射た若者の名は召朗瑪。沓達臘塔国の王子であると隠者が甘納嘎国王に告げる。沓達臘塔王が招かれ、召朗瑪と南西拉との結婚式が執り行われる。南西拉の従姉妹3人も召朗瑪の弟3人とそれぞれ結婚する。

挙式1週間後、沓達臘塔王は4組の新婚夫婦を同伴して帰国の途に着く。武芸争いに敗れて屈辱を味わった捧瑪加が、王子たちを扇動して召朗瑪一行を追跡する。捧瑪加、呪文を唱え魔術を行使する。召朗瑪も呪文を唱える。捧瑪加、瑪哈捧から授かった賽率弓に矢を番えて射る。召朗瑪、叭捧に祈願する。召朗瑪目掛けて飛来した神の矢、召朗瑪の身の回りを一周してバナナに成り変わる。その神秘に震え上がった捧瑪加、飛車に乗って逃走する。

勐果嘎臘（ムン・クオカラ）国王が死去。王子蘇万納（スワンナ）が、沓達臘

塔国王に嫁いだ妹南洁西に計報を知らせる。南洁西は、一子帕臘達を同伴して葬儀に列席する。1か月後、帕臘達を残して南洁西のみ先に沓達臘塔国に戻る。

沓達臘塔国王は、召朗瑪に王位譲渡を決意、黄道吉日に戴冠式が予定される。その前日、葬儀から戻って来た王妃南洁西は、城下の賑わい振りを見て不審に思い、侍女の達西（タシ）に事情を確かめさせる。召朗瑪の王位継承を祝福する賑わいである事を知った南洁西は顔色が変わる。自分は怪我した国王の右手小指を治療した。自分に男児が生まれたら王位を継承させると国王は約束した。召朗瑪の即位は自分への国王の約束違反である。南洁西は、達西からの入れ知恵もあって、召朗瑪に12年間城を出てもらい森林で修行させるよう国王に要求する。古来、王位の継承は長子と決っている。そなたの望みは何でも叶えるが、この件だけは応じられないと国王も一旦は断る。しかし、約束違反を楯にした南洁西の強硬な要求には国王も引き下がらざるを得ない。

戴冠式の当日、召朗瑪は国王に呼び出される。出頭した召朗瑪に南洁西が伝える。陛下はそなた達が生れる前に、私の子供に王位を継がせると約束なさった。私は今その約束の履行を求めている。話を聞いた召朗瑪は、弟帕臘達への王位譲渡を承諾し、自分は王宮を出る事を承知する。一旦為された国王の約束はどんな事があっても守られなければならない。

南西拉が、召朗瑪に同行を求める。召朗瑪の弟臘嘎納も同行を求める。早晩、王宮の後門を出た3人は、巴臘米底の森で修行の隠者を訪ね、弟子入りする。

召朗瑪一行の出奔を知った沓達臘塔は、失意の余り死去する。父君崩御の知らせを受けた第三王子帕臘達が急遽沓達臘塔国に戻り、父君の亡骸を荼毘に付す。1か月の服喪の後、帕臘達は、森に出掛け召朗瑪に会って帰城を要請する。子供は父親の約束を履行しなければならない。弟の要請を断った召朗瑪は、一足の鞋を取りだし、これは父君恩賜の神の鞋である。持ち帰って玉座の上に置き、礼拝せよと言って、第三弟の帕臘達と第四弟の沙達魯嘎とに片方ずつ渡す。

原生林の中に基沙（チシャ←キシュキンダー）国がある。牝牛5千頭を従えた凶暴な水牛が君臨している。牝牛が他の牝牛と接触する事は許さない。生れた子牛が牡なら突き殺し、牝なら成長後自分のハーレムに入れる。命を奪われた子牛の数は何万にも昇る。妊娠したある牝牛が群を離れ、洞窟の中で密かに出産する。

生れた子牛は牡であった。3年後、宝角牛は身体壮健な牡牛に成長した。平原に現われた宝角牛は、牛王が印した足跡の上に自分の足を乗せて大小を比較する。自分の蹄が父親の足跡に入りきれない事を確認した宝角牛は、牛の群目指して歩み寄る。縄張りの中に不意に侵入してきた牡牛を見付けて、怒った牛王が突進する。父子間で決闘が始まる。7日後、牛王は我が子の角で腹を刺し貫かれて息絶える。

家督を継いだ宝角牛は父親以上の乱暴者となる。帝娃拉（ティワラ←デーヴァタ＝地祇）でさえ愛想を尽かして立ち去る。帝娃拉は次のように言い残す。霸道横行するなけれ。天下には汝よりもっと強力な力の持主がいる。猿王の巴力模に挑戦して見よ。汝は、自らの卑小さを悟るであろう。宝角牛は激怒、直ちに巴力模（パリモ）のいる基沙国に向う。巴力模と宝角牛との決闘が始まる。決着がつかない。宝角牛は、巴力模を押し倒してその尾を切断する。鮮血が臀部を赤く染める。この時以来、猿の尻は赤い。巴力模がたじろぐ隙に、牛王は洞窟に逃げ込む。

牛王を追った巴力模、弟「嘎林」（カリン←スグリーヴア）を呼んで命じる。これから洞窟の中に入って牛王を倒す。入口を監視せよ。紫紅色の血が流れ出れば、牛王の死を意味する。流れ出る血が淡紅色をしていれば余が牛王に殺された事になる。その時は牛王が二度と外へ出られないよう石を積んで入口を塞げ。洞窟内に潜入した猿王は、牛王が滑って転倒したところを捕え、喉を切断する。流れ出た紫紅色の牛の血は、洞窟内の湧水と混じり合ってたちまち淡い色に変わる。

入口を見張っていた寡林は、淡紅色の血が流れ出るのを目撃、入口を封鎖して城に帰り基沙国王になる。重傷を負いながらも牛王に勝った巴力模は、入口を目指すがそこは塞がれている。巴力模は、激怒する。弟の寡林は王位篡奪を企んだ。牛王の鋭い角で石を取り除き外へ出た巴力模は、基沙城に駆け戻り寡林を罵倒する。寡林は事情を説明するが、巴力模は耳を貸さない。汝の大罪は宥し難い。命が惜しくば直ちに出ていけ。但し、汝の妻は残して行け。余の下僕とし、汝の代りに贖罪させる。妻と別れた寡林は、伊麻板の森に到着、大青樹の上に攀登って休息する。

妖婆「姐里哈達」（タリハタ←トリガター）は前蘭嘎国王「叭蘭巴」の妹で、

捧瑪加の従祖母（大叔母）に当たる。彼女には謝達（シエタ←ドウシャナ）、独臘沙（トウラシャ←トリシャラス）という二人の子供が居る。姐里哈達は、対岸にある伊麻板の森の一角を私達母子に管理させて欲しいと捧瑪加に願い出る。捧瑪加は薄暗い森の一角を親子3人に任せ、縄張りの中に入り込んで来た人間は一人残らず食い殺してよいと許可する。

隠者の下で文武両道の修行を終えた召朗瑪は、隠者に別れを告げて鬱蒼とした原生林に入る。朗瑪一行三人が入り込んだ所は、姐里哈達の支配地である。大青樹の上を見上げると、黒毛の妖怪3匹が見下ろしている。久し振りに人肉にありつける。妖怪3匹は刀を振って襲いかかって来る。召朗瑪は神弓を挽き、独臘沙に矢を射る。矢が命中して独臘沙は即死、謝達も臘嘎納の矢で命を失う。姐里哈達自身は素早く身を躱す。目の前で子供二人を射殺された姐里哈達、顔面蒼白になって伊麻板を逃げ出す。

蘭嘎城に逃げ込んだ姐里哈達は、縄張内に侵入した三人連れの人間によって我が子二人が殺された。復讐して欲しいと捧瑪加に訴える。3人連れの一人は、天女も顔負けの美人である。絶世の美女と言うからには、南西拉に違いない。召朗瑪に同行して、森の中を流浪している筈だ。余はかつて神弓を持ち上げる事ができず面子を失った。されど、予と召朗瑪とでは朗瑪の方が力は上だ。もう一人の男子とはその弟であろう。南西拉を奪う事は容易ではない。煮え切らない捧瑪加の態度に、姐里哈達は我慢がならない。いい方法がある。私が金色の鹿に変身して彼等の前に姿を表わす。西拉は鹿を見て欲しがる。召朗瑪に捕獲を求める。召朗瑪が南西拉の側を離れたら、その時に西拉をさらえよ。

伊麻板の森に来た捧瑪加は、木陰に見を隠す。姐里哈達は、一頭の金色の鹿に変身して南西拉の眼前を歩く。珍しい鹿を目にした西拉は、鹿の生け捕りを召朗瑪に求める。金色の鹿などこの世にいる筈がない。しかもこの鹿は人間を恐れない。妖怪の変形ではないか。召朗瑪は不審に思う。だが、西拉は鹿の捕獲を執拗に求める。召朗瑪は、西拉の側を離れるなど弟に命じて、鹿の後を追う。鹿は、離れたり近づいたりしながら召朗瑪を深山幽谷に誘い込む。召朗瑪、矢を射る。射抜かれた鹿は、一旦飛び上がった後、地上に落下し、姐里哈達の姿に戻る。姐里哈達は召朗瑪の声を真似て絶叫する。

悲鳴を聞いた西拉、様子を見に行くよう臘嘎納に促す。兄は側を離れるなど私に命じた。私はあなたの身の安全を守らねばならない。西拉、再度臘嘎納を促す。臘嘎納は、兄嫁の身の回りに矢で円形の環を描き、どんな事があってもこの円圏の外に出てはならないと堅く戒めて兄の後を追う。臘嘎納の出発と同時に、捧瑪加が西拉を襲う。大地の神が西拉をしっかりと抱き寄せる。捧瑪加がどんなに引っ張っても西拉はびくともしない。二本の足はまるで地下深く伸びた根と変りがない。

傍にやって来た臘嘎納を見て、召朗瑪、驚く。汝は兄嫁一人を森の中に残して来たのか。兄の声が聞えたので、飛んで来たのです。私は兄嫁の身の回りには円圏を画してその安全を大地の神に託して来ました。予は汝を呼んだりはしていない。予が追跡したのは女怪であった。奴は鹿に変身していた。我々は女怪の姦計に陥った。急いで戻らねばならぬ。不安と焦燥に駆られた召朗瑪は、地団太を踏む。荒々しく大地を踏まれて侮辱されたと受取った大地の神は、怒って南西拉の保護を止める。その途端に、円圏が消滅する。襲いかかった捧瑪加は、西拉を飛車「甫薩禿低」（フサラティ＝プシュバカ）に乗せて飛び去る。

南西拉は空中から救いを求める。南西拉を拉致する捧瑪加の姿をカラスの群が目撃する。十頭王にさらわれて行くのは召朗瑪の妻だ。召朗瑪の温情に報いなければならない。無数のカラスが空に舞い上がり、捧瑪加目掛けて襲いかかる。捧瑪加は刀を抜いて応戦する。カラスの羽根、脚、頭が切り落とされ、鮮血が飛び散る。林はカラスの死骸で一杯になる。大樹の上に人影を見た南西拉、大声で叫ぶ。私は十頭王にさらわれて行く。早く救出に来るように召朗瑪に伝えて下され。その人影とは猿王に追放された嘎林であった。蘭嘎に到着した捧瑪加、西拉を花園に幽閉する。

庵に帰って西拉の行方不明を知った朗瑪兄弟は、心当たりを捜索した末、隠者の方を訪れる。隠者は数字の経書を使って占った結果、西拉が捧瑪加に誘拐され、蘭嘎城に幽閉されている事を明らかにする。道順を教えて貰った朗瑪兄弟は、猿王が支配する基沙国へやって来る。疲れ果てた朗瑪は大木の下で横になる。寝入った朗瑪を蚊や蠅が襲う。臘嘎納が服を脱いで朗瑪の露出部分を覆う。蚊や蠅は裸身の臘嘎納を襲うが、臘嘎納は熟睡した兄を妨げないよう微動だにしない。樹上

で見ていた嘎林は、二人の兄弟愛の深さに思わず落涙する。涙は召朗瑪の顔に滴り落ちる。目を覚ました朗瑪は弟の涙でない事を確かめた後、樹上を見上げる。1頭の大猿が蹲っている。二人は猿が放尿したものと勘違いし、弓矢を取り上げる。大猿は樹下に飛び下り、それまでの経緯を語る。西拉が飛車に乗せられ捧瑪加に誘拐された事も告げる。嘎林の身の上に同上した朗瑪は、嘎林と同盟を結ぶ。嘎林も目的が達成されたら西拉救出に協力する旨、申し出る。朗瑪は嘎林の不安を払拭するため弓の試し射ちをする。朗瑪の射た矢は7本の大木を射抜いて戻って来る。

朗瑪と嘎林とは、巴力模を倒すための作戦を立てる。先ず、嘎林が巴力模を大声で罵倒して誘い出す。朗瑪は身を隠していて、決闘が始またら弓で巴力模を射る。基沙国都に着いた嘎林は作戦どおり巴力模を誘い出す。兄弟間の決着が始まる。2匹は共に白猿で、顔付きもそっくり。判別がつかない。日が暮れて決闘は引分けとなる。翌朝の決闘再開前、朗瑪はビンロウの噛み汁を嘎林の頭に塗る。決闘再開。機を見て朗瑪は巴力模に矢を放つ。

巴力模は眼の前に現れた朗瑪を睨み付け、「汝と自分との間には何の恩讐もない。それなのに、なぜ汝は我々骨肉の争いに干渉するのか。しかも闇討ちとは卑怯千万」。朗瑪が反論する。「悪は全て我が敵である。嘎林は汝の命令を忠実に実行した。彼は冤罪である。にも拘らず汝は彼の妻まで奪った。予もまた妻を奪われている。我々は共通の運命にある。相協力し合うのは当然だ」。巴力模は身を震わせて懇願する。「この矢を抜き取って欲しい」。「全身に矢毒が浸透している。もはや救済の方法はない」。死を悟った巴力模は、一子旺果の後事を託して絶命する。巴力模の亡骸を埋葬した嘎林が、基沙国猿王に即位する。

嘎林は、捧瑪加を征伐し、南西拉を救出するための猿軍を召集する。猿軍団は海岸に到着、霧で霞む大海原を前に停止する。召朗瑪は嘎林を呼んで、誰か海洋を飛べる者はいないか尋ねる。嘎林が武官達を召集する。武将達の跳躍距離は、臘塔が30約、嘎木達は40、瑪尼臘は50、摩米は60、旺果は70約に過ぎない。猿王の嘎林でさえ70約しか跳べない。摩米が阿努曼（アヌマン）を推挙する。

阿努曼は風の神「叭汶納」（パウェンナ）の子で、超能力の持主である。息子の無軌道振りに、母親は臨終の際遺言を残した。森の中で食べ物を探す時、最も

赤くて最も明るいものが見付かっても食べてはならぬ。絶対に手を出してはならぬ。木の実は、渋かったり、苦かったり、酸っぱかったり、甘かったりするが、食べるならそれを食べよ。15歳になった時、阿努曼は母親の戒めを破る事にする。この世にはまだ味わった事はないが、最も赤くて最も明るい大きな果物がある。阿努曼は身を屈めて跳躍する。東から昇って来た太陽は、阿努曼に捕まる事を恐れて、吠英に泣き付く。激怒した吠英は、閃光を放つ斧（雷電）を投げ付ける。阿努曼は頸骨を碎かれて地上に落下、即死する。我が子の死を知った風の神は、吠英に詫びる。年幼く無知であった事からの蛮行だ。悪意があったのではない。納得した吠英は、阿努曼を蘇生させた上、超能力を付与する。海上を歩く事もできれば、空中を飛翔する事もできる。火中に転落しても焼死しないし、どんな武器も阿努曼を傷付ける事はできない。阿努曼はかくて神通力を得る。

しかし、阿努曼の腕白振りは一向に改まらない。坊さんに泥をぶつけたり、袈裟を引き裂いたり、経典を破り捨てたりする。阿努曼のこの放埒振りを隠者は見逃す事ができない。坊さんと一緒に阿努曼を呪詛する。阿努曼は病魔に襲われ、骨と皮に痩せ衰える。体力も減退し、木に登る事すらできない。彼は薬草を求め、医者を探す。何か罰当たりな事をしたのではないかと医者に尋ねられた阿努曼、事実を告白する。隠者に謝らなければそなたの病は治らぬと医者が言う。阿努曼は摩米に同行してもらい、犯した自分の過ちを隠者に詫びる。隠者は了解したものの、神通力が回復するには、正義の王子に背中を3回撫でて貰う事が条件だと言う。話を聞いた召朗瑪が阿努曼の背中を撫でると神通力が回復する。朗瑪は西拉宛に手紙を書き、金の腕輪を外して阿努曼に預ける。阿努曼は3千約の上空に飛び上がって白雲に乗り、蘭嘎を目指して飛び去る。

蘭嘎城に飛來した阿努曼は一匹の青蠅に変身して宮殿内に侵入する。十頭王の寝姿を目撃するが、西拉の姿はない。玉座の上でまどろんだ阿努曼、花園の中に西拉がいる夢を見る。目を覚ました阿努曼は花園に直行する。大勢の番兵に護衛された美しい女性がいる。そこへ捧瑪加が現われ、西拉を口説く。金銀財宝は勿論、蘭嘎の全てをそなたに捧げる。予の望みを適えて欲しい。西拉、きっぱりと拒絶する。そなたの十個の頭は、その内に一つ残らず落ちてしまうだろう。捧瑪加は衛兵に命じる。7日間の猶予を与える。西拉の気持が変ればよし。さもなく

ば、一刀両断にし、煙で燻して火で炙り日光に晒せ。憤慨の表情で捧瑪加が立ち去った後、阿努曼は原型に戻り、南西拉に合掌礼拝する。阿努曼が召朗瑪に託された手紙と金の腕輪とを手渡す、南西拉は涙を流す。阿努曼、直ちに脱出を勤める。背負って飛び去ると申し出る。西拉、断わる。私は、十頭王にさらわれて蘭嘎城に連れて来られたが、今後は我が夫以外誰にも我が身に触れさせないと誓願した。どうしてそなたに負われる事ができようぞ。その代り、これを渡してほしいと言って、頭髪7本を抜き取って阿努曼に託す。

南西拉に別れを告げた阿努曼、蘭嘎城の花園を踏み荒らし、襲って来た護衛兵を殴り殺す。衛兵から報告を聞いた捧瑪加、猿を生捕りにするよう英達西達に命じる。兵士達を散々翻弄した後、阿努曼は英達西達の縄矢に捕縛される。捧瑪加の面前に引き据えられた阿努曼、己の悪行を改めなければ今に後悔するぞと言い返す。立腹した十頭王、阿努曼の処刑を命じる。しかし、刀剣も火炎も阿努曼には効果がない。結局、阿努曼の全身を布で覆い、沸騰させた油をその上に注ぎ、火を点ける。阿努曼、突如飛び上がって蘭嘎城内を飛び回る。全城が火に包まれる。捧瑪加は生命が宿った弓賽宰を持ち出し、隠者に保管を依頼する。蘭嘎城を焼き払った阿努曼、海中に飛び込むが、尾の火だけは消えない。隠者に尋ねると、体の水で消せと指示される。阿努曼は自分の尿で尾の火を消す。

捧瑪加は維亜干に阿努曼追跡を命じる。維亜干は緑の小島に化ける。飛翔に疲れた阿努曼が降下すれば抱き抱えて海中に引きずり込む魂胆である。小島を目にした阿努曼、不審に思う。行きには大海原であった。帰りに小島が出現するなんて、奇妙だ。阿努曼は急上昇した後、急降下して小島に足を突っ込む。案の定、維亜干が姿を現わす。阿努曼と維亜干との取っ組み合いが始まる。阿努曼、一計を案じ、相手の頭を一人3回ずつヤシの木の幹で殴り会う事を提案、先に維亜干に殴らせる。3回とも身を躰した阿努曼、1発で維亜干の頭蓋骨を粉碎する。無事に帰着した阿努曼、西拉に託された頭髪7本と金の首飾りとを召朗瑪に渡す。

朗瑪、蘭嘎島との間に大橋の建造を命じる。猿軍団は樹木を伐採したり、石を切り出したりして、架橋工事を行なう。3か月後、大橋は完成するが打ち寄せる波によって崩壊する。2度目の建設工事は7か月後終るが、再び波にさらわれ崩れ落ちる。召朗瑪は阿努曼を天界に派遣して叭英に訳を尋ねる。海底に大蟹がい

て架橋工事を妨害していることが判明する。

海中に潜って大蟹を捕えた阿努曼、召朗瑪の指示で鉄を2本もぎ取って釈放する。召朗瑪は鉄の1本で陣太鼓を作る。もう1本は叭英に届ける。叭英も太鼓を作る。大雨が降る前に雲の上で雷鳴がするのは、この太鼓が打ち鳴らされるからである。

捧瑪加、夢を見る。蘭嘎上空に白鷹が飛来し、蘭嘎警護の黒鷹と決闘する。黒鷹は翼を折られて地上に落下、惨死する。目を覚ました十頭王、弟の彼亜沙を呼んで占わせる。「不吉な兆だ。蘭嘎は災難に襲われる。兄上の南西ララ致が災難をもたらす。夥しい数の猿を引き連れて、召朗瑪が蘭嘎に攻め寄せて来る。正義の王子は騙せないし、森の白猿は不死身だという天神の警告を思い出すべし。この災厄を免れるには、西拉を朗瑪に返すしかない」。弟の諫言を耳にした捧瑪加、激怒する。「汝は士氣を低下させるような発言ばかりして、有効な策を何一つ提案しない。それは利敵行為だ」。捧瑪加は、彼亜沙を足蹴にし拳骨を食らわせた後、竹の筏に彼亜沙を縛りつけて大海に投棄する。筏は3日後、召朗瑪の陣地の前に漂着する。すくい上げて縄を解いた召朗瑪に対し、彼亜沙は服従を誓う。内情を熟知する彼亜沙は、以後、召朗瑪の参謀として仕える。

捧瑪加は、变幻自在の月雅嘎（ユエヤカ）を南西ラの死体に変身させ、猿軍団の陣地に漂着させる。召朗瑪は南西ラの亡骸を抱き抱えて嗚咽する。駆けつけた阿努曼、訝しがる。南西ラは召朗瑪が救助に来る事を知っている。自殺する筈がない。それに、好色淫乱な捧瑪加が思いも遂げず、西拉を殺害する筈はない。召朗瑪に申し出で西拉の亡骸を荼毘に付す。生身のまま焼かれては堪らない。月雅嘎は、煙に混じって上空に逃れる。その姿を阿努曼の神眼が見逃さない。上空に飛び上がった阿努曼、月雅嘎の両足を捕えたまま地上に連れ戻す。召朗瑪の眼の前で月雅嘎を殴り殺した阿努曼、死体を海中に蹴り落とす。

嘎林と相談した召朗瑪、捧瑪加の所に使節として旺果を派遣する。我々の目的は蘭嘎領土の占領にあるのではない。南西ラさえ返してくれれば我々は本土へ引き上げる。断れば十頭王に懲罰を加える。蘭嘎城に到着した旺果は、尾を長く伸ばしぐるぐる巻きにして、十頭王の玉座と同じ高さにしてその上に座る。十頭王が一喝する。「汝は何者か。何をしに来た」。「汝は我が父と空中で決闘したこと

がある。父は汝の一命を助けてやった。その父も召朗瑪の手で天国に昇った。汝の大叔母とその子二人も召朗瑪の手でこの世を去った。今、蘭嘎城は召朗瑪の大軍に包囲されている。南西拉を直ちに返遷する事が唯一の解決策だ」。激怒した捧瑪加は、「旺果を捕えて殺せ」と命令する。武官の貢巴嘎、貢巴吉兄弟が旺果を捕えるが、旺果は二人を両脇に抱えたまま上空に飛び上がり、二人を振り落とす。二人とも地上に激突して惨死。報告を聞いた召朗瑪は、全軍に攻撃命令を下す。

十頭王は実子、「歪亞拉」に召朗瑪兄弟の生捕りを命じる。歪亞拉は鷹に変身して召朗瑪の兵營に飛来、呪文を唱えて黒い煙を吐き出す。猿の将兵達は一人残らず昏睡状態に陥る。歪亞拉は熟睡中の召朗瑪兄弟をさらい、海岸の岩礁の上に用意した檻の中に幽閉する。翌朝日の出と共に、二人の肉体を火で炙って妙薬に調合する腹づもりである。目を覚して召朗瑪兄弟が居ない事に気づいた彼亜沙、占いで行方を探す。歪亞拉の仕業である事が判明。嘎林は阿努曼を救出に派遣する。阿努曼は登りかけた太陽を黒雲で覆って深海に押し戻した後、召朗瑪兄弟を檻の中から救出する。その後太陽を覆っていた黒雲を取り除く。同時に日が昇る。歪亞拉が海岸にくると、檻が開け放たれ、囚人達は外にいる。戦闘が始まり歪亞拉は阿努曼に殴り殺される。

召朗瑪の軍隊は蘭嘎城に進撃を始める。正門の攻撃は阿努曼と摩米、北側は猿王の嘎林と阿哈、西側は旺果と瑪尼臘、南側は嘎木と臘答、残りは召朗瑪と臘嘎納が指揮し、彼亜沙が軍師を務める。報告を受けた十頭王も迎撃体制を整え、長子英達西達に出撃を命じる。英達西達と阿努曼、干塔と嘎林との間でそれぞれ魔術による応酬が展開される。

天界に上昇した英達西達、英達に化身し、三十三頭の象に乗って降下しながら、「我は天帝の瑪哈捧に派遣されし天神の英達なり。天帝の子捧瑪加の応援に参った。猿軍団は直ちに退去せよ」と告げる。不審に思った召朗瑪、彼亜沙に尋ねて英達が英達西達の化身であることを知る。召朗瑪は、直ちに神の矢を射る。矢は鞍に命中し、鞍が壊れる。臘嘎納の矢は象の腰を射抜く。英達西達、自分の体で太陽を遮る。天地が真暗になり豪雨が降り注ぐ。驚いた召朗瑪、彼亜沙に尋ねる。「これは英達西達の仕業です。その魔影は、女性と接した事のない男でなければ

見えませぬ。妖魔を射る事ができるのは過去12年間女性の顔を見た事のない若者だけに限られます」と答える。臘嘎納が「自分は過去12年間女性の顔を見ていな。城を出てから今日まで兄嫁の顔は見ずに足元ばかり見てきた」と言う。天を仰いで透視した臘嘎納、体で太陽を遮っている英達西達の姿を確認する。召朗瑪が弟の指差す方向に神の矢を射る。矢は黒雲を突き抜けて英達西達の体を射抜く。体を撃ち抜かれた英達西達、高空から墜落して絶命する。

十頭王は、何年もの間眠り続けている姿納帕を呼び起す。空腹状態の姿納帕は猿の兵士を捕らえでは手当たり次第に丸呑みする。呑み込まれた猿達は姿納帕の鼻や耳から脱出する。姿納帕は天帝に授かった手裏剣を取りに天界の「吉沙主拉麻尼」(チシャ・チュラマニ)に向う。手裏剣は年数が経って錆びついている。姿納帕、海辺で7日7晩かけて手裏剣の錆落としをする。海水が赤変した事に阿努曼が気づき召朗瑪に報告する。召朗瑪に聞かれた彼亜沙、姿納帕が手裏剣を研いでいる。手裏剣が使われれば我が方の被害は甚大となる。但し、この手裏剣には弱点がある。生臭い臭いには耐えられない事だ」と答える。召朗瑪は、阿努曼を犬の死骸に変身させ、それを鷺と鶴に変身した旺果と嘎林に銜えさせて、姿納帕の傍に放り投げさせる。腐臭を嗅いで吐き気を催した姿納帕、手裏剣の先で犬の死骸を遠くへ押しやる。

姿納帕は、研ぎかけたままの手裏剣を召朗瑪の陣営目掛けて投げつける。手裏剣は臘嘎納の足裏に突き刺さる。臘嘎納、意識を失う。手裏剣は大青樹に変化して臘嘎納の足を大地に固定する。彼亜沙が全員に警告する。「手裏剣をしっかりと押さえよ。決して放すな。手裏剣が目標物から離れて飛び帰るようながあれば、臘嘎納は二度と生き返らない」。臘嘎納の顔色は見る見る内に蒼白となる。

召朗瑪を仕留めたと思い込んだ姿納帕は、十頭王に報告する。捧瑪加は召朗瑪の死体を見せるため南西拉を前線へ連れてくる。地上に倒れて動かないのは朗瑪ではなく臘嘎納であり、朗瑪は健在であることが西拉には判る。

靈験あらたかな仙薬が「干塔馬塔納」(カンタマタナ=Gandhamadana=香醉)山にある事を、彼亜沙が思い出す。その仙薬が手に入れば、臘嘎納の命が救える。今そのまま放置すれば、明朝、日の出と共に臘嘎納は絶命する。猿王の嘎林が阿努曼に仙薬を持ち帰るよう命じる。「私には、薬草と雑草との区別ができない」と

阿努曼が言う。彼亜沙が説明する。心配は無用。薬草は「蘇万納帕達」（スワナン・パタ=Suvanna patta=金色の若葉）と言う。名前を呼べば、返事をする。

金山に到着した阿努曼、蘇万納帕達の名前を連呼する。山の北斜面から返事が聞える。北側へ行って名を呼ぶと、西斜面から返事が返って来る。西側に行って呼ぶと、今度は南斜面から返事が聞こえる。南側へ行くと東斜面から返事が返ってくる。薬草の在りかは判らない。夜明けが迫ってくる。阿努曼は金山の半分をもぎ取って運んで来る。彼亜沙が在りかを確かめて若葉を摘み、大急ぎで煎じる。煎じた薬湯を摩米が臘嘎納の傷口に塗布する。薬液を3回塗布すると毒が消え、臘嘎納は意識を取り戻す。飛び出して元へ戻ろうとする手裏剣を阿努曼が取り押える。天帝が、姿納帕に授けた神の手裏剣は、こうして阿努曼の手に渡る。

朗瑪の首を取って来いと言われた姿納帕は手裏剣を取り戻そうと突進して来る。姿納帕の副官蘇列亜が手裏剣を受けて即死する。臘嘎納が神弓を引いて姿納帕を狙う。矢は姿納帕を射抜く。姿納帕が地響きを立てて倒れる。姿納帕の死を知った捧瑪加、撒合沙を出撃させる。撒合沙は神の棍棒「環几拉別」（ホアンチラピエ）の持主である。環几拉別は伸縮自在で、一振りで多数の敵を倒す事ができる。召朗瑪は天を覆う不吉な黒雲を見て彼亜沙に尋ねる。「神の棍棒環几拉別が撒合沙の手にある限り、我軍は壊滅的打撃を被る」と彼亜沙が説明する。召朗瑪は阿努曼を呼び、万策を講じて環几拉別を取り上げよと命じる。阿努曼、路上に躊躇り、出陣する撒合沙に哀願する。「自分は猿軍の武将として武勲を挙げたのに、召朗瑪は認めようとしている。召朗瑪は血も涙もない主君だ。自分は放逐されて行き場さえない」。話を聞いた撒合沙、「拙者が汝を引き受けよう」。撒合沙に召し抱えられた阿努曼、その能力を認められ神の棍棒「環几拉別」の保持を任される。戦場に出た阿努曼、環几拉別を使って撒合沙を撲殺する。

相次ぐ味方の敗北に、捧瑪加は天神地祇への供犠祭を執り行う。神々の加護を求めるため護摩壇が用意される。歌舞音曲が演じられ、生贊としての各種の動物が供えられる。黒雲が日光を遮り、雷鳴が轟き渡る。天神地祇の来臨である。急変した天候に不審を覚えた召朗瑪、彼亜沙に訳を尋ねる。「天神地祇が捧瑪加を支援しようとしている。我が方は著しく不利になる。直ちにこの供犠を妨げる必要がある」。召朗瑪は、阿努曼に供犠祭の妨害を命じる。夜間密かに蘭嘎城に飛

來した阿努曼、祭壇を壊し供物を散らかし生贊用の動物を逃す。

追い詰められた捧瑪加、残存部隊を率いて自ら出撃する。激戦の最中、捧瑪加軍の武将が次々と戦死する。召朗瑪の射た矢が捧瑪加の胸に突き刺さる。臘嘎納が射た矢も命中する。しかし捧瑪加は平気だ。不審がる。捧瑪加には何か特別な能力があるようだ。彼亜沙を呼んで問い合わせる。彼亜沙の心情は複雑だ。兄の靈魂は天帝に授かった秘密兵器「弓賽宰」に宿っている。その命を断つには弓賽宰で捧瑪加の体を射抜いた後、頭十個を切断する必要がある。地上に落下すると頭は、大火災を引き起こす。頭を唯一受け止める得るのは、英達の籠である。その籠は天界の「吉沙主拉麻尼」(チシャ・チュラマニ=Culanani) 宝塔にあるといったような兄の生死に直接関わる秘密を召朗瑪に明かすべきがどうか。結局、彼亜沙は十頭王の秘密を召朗瑪に打ち明ける。阿努曼を呼び寄せた召朗瑪、十頭王に変身して捧瑪加が隠者に預けてある弓賽宰を取って来るよう命じる。隠者を騙して弓賽宰を手に入れた阿努曼は、引き続き天界に赴き英達の籠も借り受ける。

捧瑪加が二度目の出撃を行なう。召朗瑪は手に弓賽宰を携え、旺果の変身する白馬に跨がって天空に飛び上がる。英達の籠を捧げた阿努曼が続く。召朗瑪の手にある弓賽宰を見た十頭王、見る見る内に顔面蒼白となる。生殺与奪の権は今や召朗瑪の手中にある。捧瑪加が召朗瑪に申し出る。「蘭嘎の領土も領民も、支配権も金銀宝玉も、全て召朗瑪に引き渡す。命ぜられれば足を洗う水も用意する。唯、命だけは助けて欲しい。死刑だけは免除して欲しい」。召朗瑪が答える。「予には他人の国土を占領する気持はない。金銀財宝も欲しくはない。罪を悔い改めるのであれば、今直ちに南西拉を引き渡せ。そして土下座して謝れ」。捧瑪加は躊躇する。「地上に跪く事だけはできない。それは我が父瑪哈捧を冒涜する事になる」。捧瑪加、7日間の猶予を貰って城に帰る。

十頭王は、曾祖父、母、三人の妻に別れを告げる。外祖父の竜王の下で魔法の習得に励んでいた捧瑪加の子「菲瑪蘭敢」が戻って来る。菲瑪蘭敢は、召朗瑪への徹底抗戦を主張する。約束の7日目、十頭王による三度目の出撃が行われる。弓賽宰の奪還を目指す捧瑪加にとって最後の出撃である。屍の山が築かれる。菲瑪蘭敢が呪文を唱えて妖法を繰り広げる。木の葉や砂粒が千軍万馬に変化して猿軍を襲う。猿軍団は四散する。阿努曼が菲瑪蘭敢に突進、生捕りにしようとする。

るが、菲瑪蘭敢の体は鰐のようにぬるぬるしていて捕縛できない。一旦基地に戻った阿努曼、菲瑪蘭敢の秘密を彼亜沙に尋ねる。「砂泥に尿を注ぎ、攪拌した後の砂泥を両手に付ければ、粘りが取れる」と教えられた阿努曼、その通りにして菲瑪蘭敢を捕える。四肢を引き裂き、身の皮を剥ぎ、頭を石にぶつける。菲瑪蘭敢は二度と生き返らない。

猿軍団が捧瑪加を包囲する。十頭王の二十の眼が爛々と光る。弓賽宰を持って天空に飛び上がった召朗瑪、捧瑪加目掛けて神の矢を射る。矢は十頭王の喉を射抜く。捧瑪加の十個の頭が落下する。英達の籠を用意した阿努曼が落下してくる首を次々と受け止め、海中に投げ込む。頭は大音響を発して爆発、海水が沸騰する。捧瑪加は、かくて地上から姿を消す。

南西拉が召朗瑪の前に現れる。召朗瑪の眼には猜疑心と嫉妬心とがある。「白い宝石が他人に盗まれ、汚染されて黒い宝石に変った。予は今のそなたが以前のそなたと同じである事を信じたい。そなたは自分の操を証明できるか」。南西拉の眼から涙が流れる。「監禁されている間、私は殿の事を忘れた事はありません。その殿が信用できないとおっしゃるのであれば、燃え盛る火の中に飛び込んで貞節を証明します。もしも私が夫に不実で、我が肉体が他人に汚されいたら、火中で燃え尽きてしまうように」。南西拉は、積み上げられて点火された薪の上に飛び込む。だが、彼女は頭髪一本焦げず、火傷一つしない。群衆は彼女の純潔を称える。召朗瑪、南西拉を受け入れる。

彼亜沙を蘭嘎の国王に命じた召朗瑪は、南西拉を伴い石橋を渡って大陸へ帰還する。嘎林指揮下の猿軍団も、基沙国に戻る。沓達臘塔国に戻った召朗瑪、王位を継承する。

年若い女官達が、捧瑪加はどんな顔をしていたのか知りたがる。像が完成した時、王宮上空に突然黒雲が現れる。女怪「妲里哈達」の靈魂が捧瑪加の粘土像の中に宿る。粘土像の眼が爛々と輝き、呵々大笑する。粘土像は両手を伸ばして南西拉の足を抱える。西拉は大声を上げるが、粘土像は抱き付いて離れない。驚愕した女官達は、四散する。「早く寝室に入って弩で粘土像を刺しなさい。粘土像は神の矢を恐がります。」と女官の一人が言う。寝室に駆け込んだ南西拉、弩で粘土像を射る。粘土像は悲鳴を挙げて倒れる。

そこへ国王の召朗瑪が帰宅する。南西拉は慌てて粘土像を寝台の下に蹴り入れる。召朗瑪が腰を降ろすと、粘土像が大声で罵り始める。「なぜ予の頭上に座るのか。汝と予とは同じ国王同志だ。全く対等の立場にある。不遜にも他人の頭上に腰を降して。汝は目が見えないのか」。驚いた召朗瑪、寝台の下を覗いて捧瑪加の粘土像を発見する。「誰が造ったのか」との召朗瑪の叱責に南西拉が白状する。召朗瑪は激怒する。「汝は、未だ捧瑪加の事が忘れられないのか。汝を救出するためにどれ程多くの者が血を流したことか。汝は鬼だ。死ぬがよい。汝の顔等二度と見たくない」。南西拉の弁明にも召朗瑪は全く耳を貸さない。召朗瑪は弟の臘嘎納に西拉の処刑を命じる。南西拉を両断してその心臓を持ち帰るべし。

伊麻板の森にやって来た臘嘎納、英捧に祈る。もしも嫂が兄上を裏切っていたなら、その首は我が刃によって一刀の下に切斷さるべし。臘嘎納が刀を振り上げた途端、無数の花が地上に咲き乱れ、南西拉の体と臘嘎納の刀とに巻き付く。臘嘎納が西拉に告げる。「早く立ち去りなされ。そして、健やかにお過しなされ」。王宮に戻った臘嘎納は、血まみれの犬の心臓を召朗瑪に差し出す。

密林の奥深く入った南西拉の目の前に、水牛が現れる。水牛は英捧の変身した姿である。西拉は水牛の後をついて行く。森の中に庵がある。隠者が出て来て、西拉を迎える。水牛は何時に間にか姿を消している。南西拉は王宮を出る前、既に懷妊していた。臨月が迫り、召朗瑪そっくりの男児を出産する。木の実、草の根を探しに出た西拉は、親子猿の姿を目撃する。母猿が嬰児を落としはせぬかと西拉は危惧する。母猿が言う。「嬰児を置き去りにしていればひもじさの余り急死する事もある。私達はいつも母子一緒。何事が起こっても心配は要らない。生きるも死ぬも一緒だから」。不安になった西拉、庵に取って返し、寝て居た嬰児を連れ出す。

隠者、目を覚ます。嬰児の姿が見当らない。虎か豹に襲われたか。妖怪に連れ去られたか。西拉が戻ってきて嬰児の失踪を知ったら氣を失うに違いない。隠者は木片を使って嬰児そっくりの像を彫り、呼気を三度吹き付ける。木片に命が宿る。庵に戻ってきた西拉、寝台の上で手足を動かして居た嬰児を抱き上げる。西拉の背中にもう一人の嬰児が背負われているのを見た隠者、驚く。事情を聞いた南西拉、双子に恵まれたと言って喜ぶ。実子には洛瑪（ルオマ←ラヴァ）、創造

された嬰児には相圭（シエンワ←クシャ）と命名する。

7年が経つ。兄弟二人は隠者から武芸を教わる。二人は父親の名前を南西拉に尋ねる。そなた達の父親は沓達臘塔国王の召朗瑪。但し、既にこの世を去っている。兄弟は話し合う。沓達臘塔国の王宮は雄大で、都は大変な賑わいだと聞く。我々は一度も行った事がない。二人は1週間かけて都に上る。都には物資が豊富だ。二人は持ってきたインゲンマメやキュウリ、マクワウリを商う。そこへ税務官の阿努曼が現れる。阿努曼は貢物としてマクワウリを献上しろと要求する。汗水流して栽培した収穫物を、只では渡せないと兄弟は拒否する。両者の間で騒動が持ち上がる。

兄弟二人に殴られ、足蹴にされた阿努曼、王宮に立ち返り、召朗瑪に訴える。天下無敵の阿努曼が手も足も出せなかつた二人の少年とは何者か。とっくに逃走はしているだろうが必ず捜し出せ。召朗瑪の布告を首に着けた駿馬は、洛瑪、相圭兄弟の瓜畠に入り、熟した瓜を食い荒らす。畠に現れた兄弟、駿馬を捕えて縄を掛ける。兵士達が縄を解くよう兄弟に要求する。兄弟は、馬に食い荒らされた瓜の賠償を逆に要求する。武官の命令で兵士達が駿馬を連れ去ろうとする。兄弟二人、武官に襲いかかり滅多打ちにする。兵士達は臘嘎納に報告する。

臘嘎納が兄弟の瓜畠に来てみると、7頭の駿馬が木の下に繋がれている。兄弟は離れた所に立っている。大胆不敵な児童だ。何故か我が兄上に似ている。目、鼻、眉は、我が嫂の南西拉そっくりだ。射殺するわけにはいかない。臘嘎納は一本の草を引き抜き、矢の代わりに射る。草の矢に射られた洛瑪が倒れる。駆け寄った臘嘎納、洛瑪を抱き起こし、「名を名乗れ、そなたの両親はどなたか」と尋ねる。兄がやられたと誤解した相圭、臘嘎納に矢を射る。兵士達は逃走し、召朗瑪に報告する。召朗瑪、直ちに軍隊を派遣する。

阿努曼の率いる部隊が、瓜畠を包囲する。召朗瑪は兄弟二人の顔を凝視する。南西拉とそっくりである。召朗瑪、身元を尋ねる。召朗瑪めがけて洛瑪が矢を射る。召朗瑪、即死する。兄弟は朗瑪が身に着けているものを取り上げ、庵へ帰る。途中突進して来た阿努曼を捕えて縛り上げる。叫び声を聞いて庵から出てきた南西拉、事情を知ってたまげる。阿努曼が捕縛され、傍には国王の宝刀が投げ出されている。弓賽宰も置いてある。地上には王冠が転がっている。全て召朗瑪の持

物である。西拉、涙を流す。兄弟二人には訳が分らない。兄弟は阿努曼に宣告する。「汝の両脚を切斷して二度と徵税活動ができないようにしてやる」。西拉は泣いて二人を制止する。「早くこの猿の縄を解いてやりなさい。猿を罵ってはなりませぬ。猿の命を断つ事は許しませぬ。この猿は、そなた達の父母の恩人であり、そなた達の父が最も信頼する武官なのです」。

南西拉は庵に駆け込み、召朗瑪が子供達二人に殺された事を隠者に告げる。隠者は、森の中に神の仙薬が湧き出るよう、英達に祈願する。現場に出掛けた隠者は、召朗瑪と臘嘎納に仙薬を含ませる。二人は蘇生する。意識を取り戻した召朗瑪は、自分が処刑した筈の妻の姿を目にする。臘嘎納からそれまでの経緯を聞いた召朗瑪、自分の誤解と猜疑心から冤罪の妻に酷い仕打ちをした事を後悔し、西拉に詫びる。「我々に父親は居ない。親戚も居ない。我々を騙すな」と言って信じようとした洛瑪、相圭兄弟も、「そなた達が射た一人は叔父であり、もう一人はそなたの達の父親なのです。特に、処刑を命じられていながら私の命を救ってくれたのは、そなた達の叔父だったのです」と言う母親の説明にやっと納得する。召朗瑪は両手を広げて二人の子供を抱きしめる。南西拉母子3人は召朗瑪と供に杏達臘塔の都に戻る。

II 「蘭嘎西賀」とラオス版、ビルマ版ラーマ物語との比較

(1) 物語の開始は「結びの巻」

ヴァールミーキのラーマーヤナは、第1篇少年の巻（バーラ・カーンダ）、第2篇アヨーデイヤーの巻（アヨーデイヤー・カーンダ）、第3篇森林の巻（アランヤ・カーンダ）、第4篇キシュキンダーの巻、第5篇美麗の巻（スンダラ・カーンダ）、第6篇戦闘の巻（ユッダ・カーンダ）、第7篇結びの巻と、全7編で構成されている。一方、東南アジア諸語版ラーマ物語の場合は、物語の構成としては原則としてヴァールミーキのバーラ・カーンダすなわち「少年の巻」ではなく、その大半が「ウッタラ・カーンダ」すなわち「結びの巻」で始まっている。

ヴァールミーキ版では、物語の主役ラーマ王子を中心に、その誕生、家族の構成が語られ、シーター姫との結婚へと話が進展するが、東南アジア諸語版では、タミール語版ラーマ物語すなわち「イラーマ・ヴァターラム」同様、先ずラーヴァ

ナの系譜、ラーヴァナの誕生、苦行による超能力の獲得、ランカー国の繁栄、ラーヴァナの凶暴性発揮等が語られる。ラーマ王子の誕生とその家族の紹介は、このラーヴァナーの紹介が終った後で初めて行われる。この事実は、東南アジア諸語版ではラーマ王子よりも物語のもう一方の主人公ラーヴァナに重点を置いているか、あるいはラーヴァナの存在を重視するジャイナ版、タミール語版などの影響が東南アジア諸語版ラーマ物語には存在している事を物語る。東南アジア諸語版の内、物語がラーヴァナの紹介で始まるのは、雲南の「蘭嘎西賀」以外に、マラヤのヒカーヤット・スリ・ラーマ、フィリピンのマハーラディア・ラーワナ、ラオスのヴィエンチャン版パラク・パラム、ムオンシン版パラク・パラム・ポンマチャク、ビルマのヤーマ・ウットウ、マハーヤーマ・ウットウ、ヤーマ・タージン、ヤーマ・ヤガン、アラウン・ヤーマ・タージン等である。その点、インドネシアのラーマーヤナ・カカウイン、タイのラーマキエン、ラオスのルアンプラバーン版等は、ラーマ重視型と言ってよい。

（2）主要登場人物の名称

蘭嘎西賀の特徴の一つは、登場人物の名前である。東南アジア諸語版ラーマ物語では、そのいずれにおいても登場人物の名前がヴァールミーキ版のそれとは少しずつ異なる。それは、インド諸語の発音体系と東南アジア諸語の発音体系の違いに基づく。

例えば、インドネシアの影絵ワヤンに現れるラーマーヤナ関係の人物名は、ラーヴァナがラウオノ、ラーマはロモ、ダシヤラタはドソロト、シーターはシント、ラクシュマナはレスモノ、ハヌマンはアノマン、ヴィビーシャナはウイビソノ、シュールパナカーはサルポクノコ、ヴァーリはスバリ、アンガダはアンゴドとなる。

タイのラーマキエンでは、ラーヴァナはトッサカン（ダシャ・カンタのタイ語読み）、ラーマはプラ・ラーム（プラは神聖なる存在を現す敬称）、ダシヤラタはトソロット、シーターはナン・シーダー（ナンは女性に対する称呼）、ラクシュマナはプラ・ラク、ヴィビーシャナはピペーク、シュールパナカーはサマナカー、ヴァーリはパーリー、アンガダはオンコットとなる。

ラオス版ラーマ物語では、ラーヴァナがポンマチャク（ムオンシン版）または

ラッパナスワン（パ・ラム・サドク版）あるいはハプカナスワン（カンタ寺本）、ラーマはランマ（ムオンシン版）またはパ・ラム（パはタイのプラと同じ。パ・ラム・サドク版、カンタ寺本）、ダシャラタはタッタラタ（ムオンシン版）またはタタラッタ（カンタ寺本）あるいはトッサロット（ルアンプラバン本）、シーターはナン・シーダ、ラクシュマナはラッカナ（ムオンシン版）またはパ・ラク（カンタ寺本）、ヴィビーシャナはピヤサ（ムオシン版）またはピクピー（カンタ寺本、パラム・サドク版）あるいはピペーク・クマン（ルアンプラバン本、クマンはクマーラのラオ語読み）、シュールパナカーはタラカタ（ムオンシン版）、ハヌマンはアヌモン（ムオンシン版、ルアンプラバン本）またはフランマン（パ・ラム・サドク本、カンタ寺本）、アンガダはアンコット（ムオンシン版）またはオンコット（カンタ寺本）、ヴァーリーはパリモク（ムオンシン版）またはパリチャン（カンタ寺本、パ・ラム・サドク版）等となる。

ビルマ語版では、ラーヴアナがダックギーリ（ダシャ・グリーヴァのビルマ語読み）、ラーマはヤーマ、ダシャラタはダッタラタ、シーターはティーダー、ラクシュマナはレッカナ、ハヌマンはハヌマン、ヴィビーシャナはビビータナ、シュールパナカーはタリガター（語原はトリガター）、ヴァーリーはバーリー、アンガダはアウングツ等と表記されている。

モン語版では、ラーヴアナがトッサグリー（語原はダシャグリーヴァ）、ラーマはラムまたはランマ・クマー（クマーは梵語クマーラから）、ダシャラタはトッサロット、シーターはソーアイテー、ラクシュマナはレッカナ、ヴィビーシャナはピペーク、シュールパナカーはサマノコット、ハヌマンはアヌマン、ヴァーリーはバーリー、アンガダはオンクット等となる。

一方、これらの登場人物は、蘭嘎西賀では、ラーヴアナが捧瑪加（ブンマチャ。語原はブラフマー・チャクラ）、ラーマは召朗瑪（チャオ・ランマ。召は男性名に対する呼称）、ダシャラタは沓達臘塔（タタラタ）、シーターは南西拉（ナン・シラ。南はタイ語、ラオ語のナンと同じ）、ラクシュマナは臘嘎納（ラカナ）、ハヌマンは阿努曼（アヌマン）、ヴィビーシャナは彼亟沙（ピヤシャ）、シュールパナカーは姐里哈達（タリハタ）、ヴァーリーは巴力模（パリモ）、アンガダは旺果（ワンクオ）等となる。

以上の人物を一覧表にすると次のようになる。(ラオスはムオンシン版のみ)

ヴァーリミーキ	インドネシア	タイ	ラオス	蘭嘎西賀	ビルマ	モン
ラーヴァナ	ラウオノ	トッサカン	ポンマチャク	ブンマチャ	ダッタギーリ	トッサグリー
ラーマ	ロモ	プラ・ラーム	ランマ	チャオ・ランマ	ヤーマ	ランマ
ダシャラタ	ドソロト	トソロット	タッタラタ	タタラタ	タッタラタ	トッサロタ
シーター	シント	シーダー	シーダー	シーラ	ティーダー	ソーイテー
ラクシュマナ	レスモノ	プラ・ラック	ラッカナ	ラカナ	レッカナ	レッカナ
ハヌマーン	アノマン	ハヌマーン	アヌモン	アヌマン	ハヌマン	アヌマン
ヴィビーシャナ	ウイビソノ	ビベーク	ビヤサ	ビヤシャ	ビビータナ	ビベーク
シュールバナカ	サルボクノコ	サマナカ	タラカタ	タリハタ	タリガター	サマノコット
アンガダ	アンゴド	オンコット	アンコット	ワンクオ	アウングッ	オンクット
ヴァーリ	スバリ	パーリー	パリモク	パリモ	バーリー	バーリー
スグリーヴァ	スグリウオ	スクリーブ	カリン	カリン	トウジェイ	ソイングリット

この表から、幾つかの事柄が明らかになる。第一に、東南アジアのラーマ物語では、ラーヴァナがそのままの形で呼ばれる事は少なく、頭を十個具えていた事から「十の頭」または「十の頸」(数字の十=サンスクリット語Daśa、パーリ語Dasa、頭=Kanṭha, Griva)と表現される事が多い。タイのトッサカン、モン語のトッサグリー、ビルマのダッタギーリ等がそれである。ラウオノの別名として使われるインドネシアのドソ・ムコも、語源的にはDasa Mukhaなすわち「十の面」である。ラオスのポンマチャクはサンスクリット語のBrahma Cakraすなわち「梵天の輪盤」を意味する。第二に、登場人物名を全体として見た場合、ラオスのムオンシン版と雲南省の傣版との間には共通した形が多い。ダシャラタ、ラクシュマナ、ヴィビーシャナ、ヴァーリ等がそうである。第三に、ビルマ語版の人物名もラオス版、雲南版の人物名に類似している。ラーヴァナの妹シュールバナカを表わすTri Gataは、彼女が「三つの頭」を持っていた事に因んでそう呼ばれるのだが、この形が使われているのは、ラオス、ビルマ、雲南の三版のみに限られる。第四に、「十車」(Daśa Ratha)と言う意味を現す「ダシャラタ」は、ラオスのムオンシン版と雲南版の双方でThattarathaまたはThatalathaのように第四音節だけでなく第一音節もまた有氣音で表わされている。この事実は両

版の起源が同一である可能性を示す。それ以上に注目される事は、Daśarathaの第二音節にある摩擦音 S がインドネシア、タイ、モンの 3 語版では摩擦音のまま保たれているのに対し、ラオス、雲南、ビルマの 3 語版では T 音に変わっている事である。パーリ語、サンスクリット語の摩擦音 S が T（正確には舌尖が上の門歯の尖端に接する歯音の t）に変わるのはビルマ語の音韻的特徴であるが、ラオ語や雲南の傣語は共に摩擦音を持っているから、パーリ語、サンスクリット語起源の摩擦音をわざわざ歯音あるいは歯茎音で表す不自然な表記をする必要はない。それなのに、S 音でなく T 音がこの両版で使われている事は、両版の起源となつた元の版が T 音で表記されていたからに他ならないと考えられる。ダサラタ王の名称に関する限り、ラオスのムオンシン版や雲南の蘭嘎西賀版の原版は、タイ語版ではなくビルマ語版であった可能性が濃い。

（3）捧瑪加（ラーヴァナ）は大梵天の子

ヴァールミーキ版の「結びの章」によると、プラフマーの孫ヴィスヴェーシュヴュラと羅刹スマリーの娘カイカシーとの間に子供が 4 人生れるが、その第 1 子がラーヴァナである。言い換えると、ラーヴァナはプラフマーの曾孫と言う事になる。東南アジア諸語版におけるラーヴァナと大梵天の関係は、（1）大梵天の孫（ジャワ版スラット・カンダ、マラヤ版ヒカーヤット・スリ・ラーマ）、（2）大梵天の子（ラオスのムオンシン版、ビルマ版ヤーマ・ウットウ）、（3）大梵天自体の生れ変り（ラオスのヴィエンチャン版）と、3 種に分れる。「蘭嘎西賀」では、捧瑪加（ラーヴァナ）の父は大梵天だとされる。従って、蘭嘎西賀ではラオスのムオンシン版、ビルマ語版等と同じ扱いをしている事が判る。一方、タイのラーマキエンやラオスのルアンプラバン版では、トッサカン（=ダシャカンタ）はロンカーエ王プラスティヤの子供 5 人の長子として生れるが、プラスティヤの父は羅刹チャトラバクタだから、トッサカン（ラーヴァナ）は羅刹王の孫と言う事になる。もっとも、トッサカンの前身はカイラーサ山で自在天（イシュヴァラ）に仕える玄関番のノントク（=ナンダカ）であった。

（4）捧瑪加（ラーヴァナ）兄弟の誕生

「蘭嘎西賀」の記述によると、ラーヴァナの母親は蘭嘎国王「叭蘭巴」の一人娘「古蒂提拉」で、伊麻板の森で修行中に「瑪哈捧」（マハー・ブンくマハー・

（プラフマー＝大梵天）が天界から降臨する。古蒂提拉は最初に十個の実が付いたマンゴーの枝を、二回目には象牙のマンゴーを、そして三回目には金色のマンゴーを瑪哈捧に差し上げる。瑪哈捧は古蒂提拉の腹を3回撫でて、汝は男児に恵まれるであろうと述べて立ち去る。古蒂提拉は十か月後、三児を出産する。最初の子は中央に四個、左右の肩に上に三個ずつ、合計十個の頭を持つ奇怪な嬰児であった。古蒂提拉の師はその子に捧瑪加と命名する。鴉のように黒く恐ろしい形相をしていた第二子は姦納帕と命名され、健康で雅やかな第三子は彼亜沙と命名される。

東南アジア諸語版の中でこの「マンゴー・モチーフ」が見られるのは、蘭嘎西賀の他に、ラオスのムオンシン版とビルマ語のヤーマ・ウットウ、マハーヤーマ・ウットウ、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージンの4版だけである。尚、マハーバーラタには未婚の少女クンティーによるカルナの出産話がある。

（5）父親からの超能力の付与

成長した捧瑪加三兄弟は、父親に会うため五年の間瞑想、梵行を続ける。再び下界へ降臨した瑪哈捧は、三兄弟に望みのものを与える。捧瑪加は不死身と無敵の力を貰う。但し、それは、正義の王子と白猿と神の弓「阿沙尖」には通用しない。姦納帕は十二年間の睡眠を保証される。彼亜沙は神の書物と深遠な知識とを授かる。この蘭嘎西賀と同じエピソードを共有するのは、ビルマ語版とラオスのムオンシン版のみである。

ラーヴァナが神通力を得るのは、ヴァールミーキ版やタミールのカンパン版ラーマーヤナ等によると、十個ある頭を千年に一個ずつ切り落して火中に投じる苦行を九千年間続けた結果、その苦行をプラフマー神に認められ、不死身と無敵の力を与えられる事になっている。この「苦行と誓願」のモチーフは、マラヤのヒカーヤット・スリ・ラーマやフィリピンのマハー・ラディア・ラーワナ等には受け継がれているが、蘭嘎西賀やビルマ語版には無い。

（6）南西拉（シーター）は焼身自殺した娘の生れ変り

シーターは、ヴァールミーキ版の「少年の章」ではミティーラーのジャナカ王が土地を耕している時に大地から出てきた地母神の娘だと記されているが、「結びの章」ではその前身は大仙クシャドワジャの娘で、ヒラマヤの森でヴィシュヌ

神を念じて苦行中にラーヴァナに横恋慕され、その懲罰を発誓して火中に飛び込み焼死したヴェーダヴァティーだとされる。シーターの前身の焼死、シーターへの生れ変りは、ジャイナ版ラーマーヤナやカシミール版ラーマ物語ラーマヴァターラ・チャリタにも見られる。シーターの生れ変り説は、東南アジア諸語版にも広く受け継がれている。但し、その前身は、ヴィシュヌの妃シュリー（ジャワ版スラット・カンダ）またはラクシュミー（タイ版ラーマキエン）、スジャータ（ラオスのヴィエンチャン版及びクワイ・トラピー版）、乾達婆の娘（ビルマ版ヤーマ・ウットウ）等と、様々である。一旦焼死した後生れ変る事、ラーヴァナの妻マンドーダリーに託胎して生れ出る事等の点では共通している。もっとも、ラーヴァナの妻から生れても、その父は、マラヤ版ヒカーヤット・スリ・ラーマでは、ラーヴァナではなくラーマの父親ダシャラタ王という形を取る。また、ルアンプラパン版では、トサロット王の妃から生れた5人の子供の末子がシーターと言う事になっている。ラーマ王子とシーター妃との関係は、ここでは実の兄妹と言う事になる。（ラーマとシーターとが兄妹であったという記述は、ジャータカ第461話「ダシャラタ・ジャータカ（十車王本生譚）」にも見られる）。「蘭嘎西賀」では、伊麻板の納里本と言う樹木の下で祈祷修行していた南西拉（シーター）が捧瑪加に口説かれ逃げ場を失った揚句、捧瑪加を呪詛しながら火中に飛び込んで焼死する。蘭嘎西賀と同じ形を取っているのが、ラオスのムオンシン版である。

（7）サーマ・ジャータカの導入

蘭嘎西賀では、水辺に水を汲みに来た若い帕拉西（パ・ラシ＝修行者）を水を飲んでいる鹿だと間違えた沓達臘塔（タタラタ）王が矢を射る場面がある。悲鳴で駆け付けた国王は矢傷を負った修行者を庵まで運び、薬草を使って熱心に介抱する。その甲斐あって、行者は回復する。この場面は、ジャータカ第540話「サーマ・ジャータカ（炎摩賢者本生譚）」のラーマヤナへの導入に他ならないが、東南アジア諸語版の中でこの場面を取り込んでいるのは、蘭嘎西賀のほかにはビルマ語版があるだけである。国王に矢を射られた若い行者は、蘭嘎西賀では国王の看病で奇跡的に回復するが、ビルマ語版では矢毒で落命する。行者には盲目の両親がおり、息子の死を知った両親も、国王を呪って死ぬ。その呪いとは、国王もまた自分達同様、息子と別れる苦しみを味わうようにとの呪いであった。話の展

開からすると、蘭嘎西賀よりはビルマ語版の方が「サーマ本生譚」により忠実である。なお、ビルマ語版では、後にヤーマ王子がコーチー妃の企みで王宮から追放され、ダッタラタ王が悲嘆死する遠因が、ここで示される。

(8) ラーマ兄弟四人の誕生

アヨーダヤ国のダシャラタ王には嗣子がない。ヴァールミーキ版では、馬の犠牲祭を執行する事によって後継者の誕生を祈願する。王妃三人が懷妊し、正妃カウサリヤーからラーマ王子、カイケーイー妃からはバラタ王子が、そしてスミトラー妃からはラクシュマナ、シャトルグナの双生児が誕生する。アドヤートマ・ラーマーヤナやタイのラーマキエンでは、供犠祭の席上出現した神の食物を王妃三人が食べて懷妊、王子四人を出産する。一方、蘭嘎西賀では、沓達臘塔王は、誤って傷つけた行者を介抱した謝礼として行者からバナナを二本貰う。国王はそのバナナを王妃二人に一本ずつ渡す。二人の王妃は自分のバナナの半分をもう一人の王妃に分け与える。王妃三人は懷妊し、男児を出産する。第一王妃からは召朗瑪、第二王妃からは帕臘達、第三王妃からは臘嘎納と沙達魯嘎の双子が生まれる。東南アジア諸語版の中で、この「バナナ・モチーフ」が述べられているのは、蘭嘎西賀以外にビルマ語4版があるだけである。

(9) ラーマの追放期間は12年間

南西拉と結婚した召朗瑪は、父親の沓達臘塔から王位を譲渡される事になっていたが、国王が若い頃に第二王妃と交していた約束を実現するため王位を弟帕臘達に譲り、自らは南西拉と弟臘嘎納とを伴い王宮を立ち去る。その期間は12年間である。ラーマ王子の追放の期間は、ヴァールミーキ版でもカンパン版でも14年間とされている。東南アジア諸語版の中では、タイ版とクメール版のリアムケーとが共に14年間である。追放期間を12年間とするのは、蘭嘎西賀以外にラオスのムオンシン版やビルマ語4版がある。なお、インド諸語版の中で追放12年とするものには、ジャイナ版やダシャラタ・ジャータカ、漢訳經典の雜宝藏經等がある。

(10) 姐里哈達と謝達、独臘沙とは母子

ヴァールミーキ版では、ラーヴァナの妹シュールパナカーが美男子のラーマを見初めて口説く。ラーマに断られラクシュマナからも冷たくあしらわれたシュールパナカーは、シーターを殺めようとしてラクシュマナに鼻と耳とをそがれる。

シュールパナカは復讐のため兄弟のカラとドゥシャナを呼び寄せるが、その二人も配下の羅刹軍もラーマ、ラクシュマナに皆殺しにされる。ランカに逃げ帰ったシュールパナカは、兄のラーヴァナにラーマ一行への復讐をするため、シーター誘拐をもちかける。シュールパナカとカラ、ドゥシャナとが兄弟姉妹の間柄にある事はタミールのカンパン・ラーマーヤナでも同じである。東南アジア諸語版の中では、タイのラーマキエンが、トウート（<ドゥシャナ）、コーン（<カラ）とサマナカ（<シュールパナカ）とが兄弟姉妹である旨記述している。

ところが、蘭嘎西賀に登場する姐里哈達は蘭嘎の前国王叭蘭巴の妹で、「謝達」と「独臘沙」とはその子供だとされる。母子三人は、伊麻板の森の一部を捧瑪加に縄張りとして認めて貰っている。縄張りの内の生き物の生殺与奪の権は、全てこの母子三人が握っている。羅刹三人は縄張りに侵入して来た召朗瑪一行三人に襲いかかるが、謝達と独臘沙とは朗瑪に弓で射殺される。蘭嘎へ逃げ帰った姐里哈達は、子供二人の復讐のため捧瑪加に南西拉の誘拐をもちかける。シュールパナカとカラ、ドゥシャナの三人を親子として記述している点では、ビルマ語版、ムオンシン版共に同じであるが、カラとドゥシャナをビルマ語版ではシュールパナカの息子、ムオンシン版では娘としている点が異なる。

(11) 金の鹿に変身するのは姐里哈達

ヴァールミーキ版ではシーターからラーマ兄弟をおびき出すために黄金の鹿に変身するのは、羅刹のマリーチャである。タイ版でも、カカナサンの子マリート（マリーチャ）が金の鹿に変身する。それに対し、蘭嘎西賀で金色の鹿に変身するのは捧瑪加の妹姐里哈達である。従って、蘭嘎西賀にはマリーチャは登場しない。ラーヴァナの妹が金色の鹿に変身するのは、蘭嘎西賀の他に、ビルマ版（タリガターまたはガンピー）とラオスのムオンシン版とがある。

(12) シーターの身の回りに描かれた呪圈

シーターがラーヴァナに誘拐される場面は、ヴァールミーキ版とカンパン版では、ラーマに矢を射られた金色の鹿（羅刹マリーチャの変身）がラーマの声を模倣して悲鳴を上げる。それを聞いたシーターがラクシュマナを救援に行かせる。一人残ったシーターをラーヴァナが飛車に乗せて拉致すると言うように描かれている。蘭嘎西賀では、朗瑪の救援に赴く際、臘嘎納は西拉の周囲に矢で円圈を描

き、大地の女神にその庇護を委ねる。捧瑪加が現われ西拉を連行しようとするが、地母神が西拉の両足をしっかりと抱きかかえているため連れ去る事ができない。朗瑪救援に駆け付けた臘嘎納が、西拉の警護を放棄したと朗瑪に叱責され、地母神に嫂の保護を依頼して来たと説明する。大地への保護依頼等信用できないと朗瑪が言った途端、憤慨した地母神が西拉の足から手を放す。呪圈が消滅し、西拉は捧瑪加に拉致されると叙述されている。

この「呪圈設定」のモチーフは、東南アジア諸語版に広く見られるが、ジャワのスラット・カンダやマラヤのヒカヤット・スリ・ラーマ（ベルリン写本）では、レスマナ（またはラクサマナ）がシンタの回りに短剣（クリス）で円陣を描く。ラーヴァナは食物を求める老人に扮して現われるが円陣の中には入れない。食べ物を渡そうとシンタが円の外へ手を差し出したところラーヴァナにその手を掴まれ連れ去られる。ヤーマ・ウットウ、マハーヤーマ・ウットウ、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージン等のビルマ語版では、ティーダーの身の回りにレッカナが陀羅尼で円圈を三重に描き、圈外へ出ぬようティーダーに言い残す。行者に扮して現われたダッタギーリに、ティーダーは布施を渡そうとして圈外に出る。ダッタギーリに捕えられて誘拐される。東南アジア版の中では、蘭嘎西賀以外に大地の女神（ナン・トラニ< *Dharani* >）にシーターの庇護を依頼する形を取っているのは、ラオスのムオンシン版だけである。

（13）シーター捜索中のラーマ兄弟と遭遇したのはスグリーヴァ

ヴァールミーキ版では、ラーヴァナに誘拐されたシーターを捜索中のラーマ兄弟の姿を最初に見掛けたのは、猿の首領スグリーヴァで会った。彼は、二人がヴァーリーに派遣された刺客ではないかと疑う。恐怖におののき狼狽するスグリーヴァは、二人の素性を確かめるためハスマーンを派遣する。ハスマーンは苦行僧を装ってラーマ兄弟に近づき話し掛ける。

蘭嘎西賀では、行方不明になった西拉を捜索中の朗瑪が疲れて大木の下で横になる。寝込んだ朗瑪が蚊や蠅に襲われないよう、臘嘎納が服を脱いで朗瑪に着せかける。裸身の臘嘎納を蚊や蠅が襲うが、熟睡中の兄の妨げにならないよう臘嘎納は微動だにしない。その光景を樹上の嘎林が目撃、二人の兄弟愛の深さに思わず落涙する。この話はビルマ語版にもある。但し、ビルマ語版で弟レッカナを襲

うのは蠅や蚊ではなく、鶏位の大きさがあるアブである（ヤーマ物語とマハーヤーマ物語およびヤーマ・タージン。アラウン・ヤーマ・タージンでは普通のアブや蚊）。ラーマ兄弟とスグリーヴァとの邂逅場面はラオスのムオンシン版には見られないが、インドネシアのスラット・カンドやマラヤのヒカヤット・スリ・ラーマでは取扱われている。

(14) 猿の武将達の飛行距離

海岸まで来た猿達は大海原を眺めて嘆息する。蘭嘎島は三千約（由旬）の海の彼方に横たわっている。召朗瑪は大海原の上を飛べる者は居ないのかと嘎林に尋ねる。各武将の跳躍距離は最大限30約乃至70約に過ぎない。三千約もの距離を跳躍できるのは風の神「叭汶納」の子「阿努曼」だけである。乱暴の度が過ぎて行者に呪詛され超能力の発揮を抑制されていた阿努曼は、召朗瑪の威力で超能力を回復し蘭嘎島へ渡る。この猿の武将達の跳躍距離を具体的に明示しているのは、蘭嘎西賀以外に、ビルマ語版があるだけである。ビルマ語版は、ヤーマ物語とマハーヤーマ物語とがナラの10由旬からサンブマンの80由旬まで、ヤーマ・タージンがンガモウタの40由旬からアヌカマの80由旬までと記述されている。尚、猿の跳躍距離はヴァールミーキ版でもガヤの10由旬からジャンバウアットの90由旬まで取扱われている。

(15) シーターがハヌマンに託した頭髪

ランカー島に渡ったハヌマンは、ヴァールミーキ版では、インドラジットに捕えられラーヴァナの命令で焚殺刑に処せられるが、不死身のハヌマンはランカー城を全焼させて帰還する。ヴァールミーキ版、カンパン版、アドヤートマ版などでは、ハヌマンは大陸に戻る前シーターからその髪飾り（Choodamani）を託されラーマに届ける。蘭嘎西賀で阿努曼が南西拉に託されるのは髪飾りではなく彼女の頭髪7本である。この「頭髪託送モチーフ」が見られるのは蘭嘎西賀以外にビルマ語版があるだけである。託される頭髪の数は、ヤーマ物語とマハーヤーマ物語とが7本、アラウン・ヤーマ・タージンは10本となっている。

(16) 十二年間異性の顔を見なかった臘嘎納

ラーヴァナの息子メーガナータは魔術に通じ、幻術、隠遁の術が行使できる。かつて天界においてインドラを征した事がありインドラジットとも呼ばれるこの

メーガナータには、ハヌマーン、スグリーヴァ、アンガダ、ジャンバヴァットといったラーマ陣営の勇将がござって重傷を負わされている。ラーマ、ラクシュマナもインドラジットが使う蛇の投げ縄によって瀕死の重傷を負わされるが、ハヌマンがカイラーサ山から持ち帰った薬草ヴィシャリヤ・カラニーによって辛うじて蘇生する。そのインドラジットも、ラクシュマナが放った神授の矢で殺される。

この卓越した戦闘力を持つ英達西達（インタシタクインドラジット）を倒すには、朗瑪陣営も苦慮する。蘭嘎西賀では、英達西達が操る三十三頭の象が臘嘎納の放った矢で射抜かれた時、英達西達が天空に駆け上がり身を以て太陽を遮る。天地は漆黒の闇となる。兄への苦言が受け入れられず追放されて朗瑪陣営に加わり参謀として仕えている彼亜沙の説明によると、この暗闇の中で英達西達の魔影を見る事ができるのは、過去十二年間異性の顔を見た事がない者に限られると言う。その様な特殊な条件を満たす者は皆無に近い。その時、王宮を出て以来12年間、片時も兄夫婦の傍を離れた事のない臘嘎納がその特赦な条件を満たす事が判明する。臘嘎納は嫂に応対する時、常に足元に視線を落し、決してその顔を見ようとはしなかったと言う。朗瑪は、闇の中を透視して妖魔の姿を確認した臘嘎納が指差し示す方向に神授の矢を射る。英達西達は体を両断され、四千万由旬の高空から墜落して絶命する。インドラジット征服に異性の顔を十二年間全く見ていないと言う特殊な条件を設定しているのは、東南アジア諸語版の中では、蘭嘎西賀以外に、ビルマ語五版があるだけである。このモチーフの原形は、ヴァールミーキ版やカンパン版ではなく、ベンガル版にある。但し、ベンガル版では、その期間が14年間と長く、とかもその間クラシュマナは一睡もせず何も食べていない事になっている。

III 蘭嘎西賀とラーマキエンとの類似点

以上の特徴から見ると、蘭嘎西賀は、ラオスのムオンシン版やビルマ語諸版との間に密接な関係を持っている事を窺わせるが、一方では、タイのラーマキエンとの間にも幾つかの共通性を示す。両者間に見られる共通の特徴には次のようなものがある。

（1）ラーマ王子によるカラスの懲罰

ヴァールミーキ版では、夜叉女タータカの息子マリーチャとスパー夫の2羅刹が聖仙ヴィシュヴァミトラの苦行を妨害する。マリーチャは海に追い落とされ、スパー夫はラーマの矢に射殺される。タイ版では、巨大なカラスに変身可能な羅刹カカナスンが、トッサカンの指令で修行中の行者を殺害する。長老行者ワシット（ヴァシッタ）、サワミット（スヴァミトラ）の要請で協力を求められたラーマ、ラクシュマナ兄弟はカカナスンとその子サワーフを弓矢で射殺す。蘭嘎西賀では、伊麻板の森で修行中の隠者の庵にカラスの群が乱入して供物を食い荒らす。隠者に協力を求められた召朗瑪は、無用の殺生を避けるため的を外して矢を射る。カラスの群は轟音にたまげて逃避するが、執拗に矢に追跡された揚句、召朗瑪に謝罪して命を取りとめる。ヤーマ王子によるカーカウン鴉の懲罰物語はビルマ版にもあるが、ヤーマ王子は、蘭嘎西賀同様、カラスを殺さない。その目をくりぬいて釈放する。これはヴァールミーキ版のチトラクータ山での話に由来する。

（2）捧瑪加の悪夢

タイ版では、ハヌマンによるランカー焼失後、トッサカンが悪夢を2回見る。1回目は、黒いハゲワシと白いハゲワシとが決闘をし、黒鷲が敗れて墜落死する夢である。2回目は、ココヤシの殻に芯を入れ油を注いで掌に載せたところへ女が駆け寄って火を点ける。燭台は燃え上がり火が掌に燃え移ると言う夢である。弟ピペークの占いによると、黒鷲はトッサカン、白鷲はプラ・ラーム、ココヤシの燭台はロンカー城、油はトッサカン一族、点火した女はサマナカー、全てを焼き尽した炎はシーダーである。トッサカンはラームに敗れ、ロンカーは破滅する事を意味していると言う。

この黒鷲と白鷲との決闘の夢は、蘭嘎西賀でも黒鷲の落下、惨死と言う形で述べられている。弟彼亜沙の夢の分析では、悪夢の原因是南西拉を拉致した捧瑪加の悪行に求められる。悪夢の場面はビルマ版やラオスのムオンシン版には無い。

（3）ナン・シーダーの贋死体

タイ版では、ラーマと猿軍団とを撤退させるため、トッサカンが、ピペークの娘ベンヤカイをナン・シーダーの贋死体に化けさせてプラ・ラームの陣営に漂着させる。シーダーの亡骸を目撃したラームは悲観にくれる。不審を抱いたハヌマンが亡骸を荼毘に付す。煙に紛れて逃げ出したベンヤカイをハヌマンが追跡して

捕える。

ベンヤカイによる贋死体エピソードは、蘭嘎西賀では月雅嘎（ユエヤカ）、モン語版ラーマ物語「ロイク・サモイン・ラーム」ではピペークの娘スponナカによる贋死体事件として取り扱われている。死体が荼毘に付される際、月雅嘎あるいはスponナカは煙に紛れて脱出しようとし、ハヌマンに追跡、捕縛される点も同じである。シーターの贋死体エピソードはビルマ版やラオスのムオンシン版には見られない。

（4）マイヤラープによるラーマ誘拐

タイ版では、プラ・ラーム軍のランカー進攻を知ったトッサカンが、冥界（パタラ）の王マイヤラープに協力を求める。マイヤラープは魂を肉体から取りだし蜂に変えて山中に隠しているため不死身である。しかも、強力な粉末催眠薬を筒を使って吹き付け相手を眠らせる特技を持っている。彼は山の上から催眠薬を散布し、猿軍団が眠り込んだ隙にプラ・ラームを冥界に連れ去る。ハヌマンが蓮華の茎を通り抜けて地底に向い、スワン・マッチャに生ませた我が子マッチャヌの協力でマイヤラープを殺し、鉄の檻に幽閉されていたラームを救出する。

タイ版のマイヤラープに相当するのが、蘭嘎西賀の歪亞拉（ワイヤラ）である。捧瑪加の子歪亞拉は妖法の持主で、強力な催眠薬を保持している。朗瑪兄弟の生捕りを命じられた歪亞拉は、空中から催眠薬を散布して猿達を昏睡状態に陥らせた後、熟睡中の朗瑪兄弟を拉致する。兄弟の命は夜明けと共に消えるので、救出に向った阿努曼は、昇りかけた太陽を黒雲で覆い一旦深海に押し戻した後、歪亞拉を殴り殺して朗瑪兄弟を救出する。

マイヤラープによるラーマ誘拐のエピソードは、マラヤ版のヒカーヤット・スリ・ラーマ（パートーラ・マハーラヤン）やラオス版のクワイ・トラピー、モン語版のロイク・サモイン・ラーム（ワイヤラプ）等、東南アジア諸版に広く見られる（ビルマ語版には見られない）が、その原形はクリティヴァーサのベンガル版ラーマーヤナ（マヒ・ラーヴァナ）やタミール語のマイリラーヴァナン、マラヤラム語のラーマカタパットウ等の非ヴァールミーキ版にあるのではないかと考えられる。（S. Singaravelu 1986 p.21, A.G.Menon 1991 PP. 62-64, Philip Lutgendorf 1995 p. 4）

(5) クンバカルナの魔の槍

タイ版では、トッサカンの弟クンバカーンが神与の槍モッカシャク泰イに法力を回復させるため供犠を行なう。ハヌマンが犬の死骸に化け、カラスに化けたオンコットがその死骸を突つく。腐臭に弱いクンバカーンは供犠を中止するが、翌日の戦闘では彼はその槍を使ってラクシュマナを倒す。神与の槍モッカシャク泰イは、蘭嘎西賀では姦納帕が天帝に授かった神与の手裏剣と言うことになっている。姦納帕は海辺で手裏剣を研いで鏽落としをする。刃の研磨が完了すれば、無敵の武器が出現する。海水の赤変から事情を悟った召朗瑪は、阿努曼を派遣して妨害させる。阿努曼は犬の死骸に扮し、鶴に扮した旺果が死骸を啄む。吐き気を催した姦納帕は研磨を中止するが、戦闘で使われた手裏剣は臘嘎納の足裏を刺し貫き、臘嘎納の意識を失わせる。クンバカルナの魔の槍のエピソードは、モン語版ロイク・サモイン・ラームにもクンマカンによる四面の槍の研磨と言う形で登場する。しかし、ビルマ語版ラーマ物語（ヤーマ物語、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージン、ヤーマ・ヤガンの4作品）には記述されていない。

(6) 肉体と魂とを分離したラーヴァナ

タイ版では、プラ・ラームと戦闘中トッサカンは、その首を何度もラームに斬り落とされる。しかし、トッサカンの首は直ぐに再生する。トッサカンの不死身の秘密は、その魂が肉体から取り出され、特殊な容器に納められて師のコーブットに預けられている事にある。コーブットを騙してトッサカンの魂が入っている容器を借り出したハヌマンは、ラームの放った矢がトッサカンの胸を射抜くのを確認して容器を碎く。

蘭嘎西賀の捧瑪加も、召朗瑪兄弟に矢を雨霰のように浴びせられるが、全く平気である。捧瑪加の魂がその肉体ではなく天帝に授かった弓賽宰に宿っていることを彼亜沙から聞き出した朗瑪は、阿努曼を隠者の下に派遣して弓賽宰を騙し取らせる。朗瑪はその弓賽宰を使って捧瑪加の首十個を切断する。

ラーヴァナの魂が心臓にではなく別の所に宿っている話は、マラヤ版のヒカヤット・スリ・ラーマにもある。そこでは、ラーワナの不死身の秘密は、右耳の直下にある小さな頭の中に宿っているため、ラーワナの首は何度切り落とされても直ぐに再生する。その秘密を知っているシーターがハヌマンを通じてラーマに伝え

る。右耳の直下にある小頭をラーマに射抜かれたラーワナは遂に絶命する。

IV 蘭嘎西賀固有のエピソード

蘭嘎西賀は、以上述べたように、東南アジアのラーマヤナ諸版との間に共通性、類似性を持っているが、一方、他の版には見られない独自のエピソードも内包している。次のような点は、蘭嘎西賀固有のエピソードだと言ってよいであろう。

(1) 阿努曼と維亜干との決闘

捧瑪加は、ランカー城を全焼させた阿努曼の追跡を維亜干に命じる。維亜干は緑豊かな小島に変身して阿努曼を待ち伏せする。飛翔に疲れた阿努曼が休憩に立ち寄れば、抱き抱えて海中に引きずり込む魂胆であ。しかしその企みは警戒心の強い阿努曼に見破られ、頭を強打されて死ぬ。

(2) 鰐に似た菲瑪蘭敢

外祖父の龍王の下で魔法を習得して帰った捧瑪加の子菲瑪蘭敢は、自分の魂が宿る弓賽率を朗瑪側に騙し取られて完全に戦意喪失した父に対し、朗瑪への徹底抗戦を主張する。戦場で妖法を展開する菲瑪蘭敢のため猿軍団は四散する。阿努曼が菲瑪蘭敢を生捕りにしようとするが、菲瑪蘭敢の体は鰐のようにぬるぬるして捕縛できない。砂泥に尿を注ぎ攪拌した後の砂泥を両手に付ければ粘りが取れると彼亜沙に教えられた阿努曼、教えられた通りにして菲瑪蘭敢を捕らえ、四肢を引き裂き、身の皮を剥ぎ、頭を石にぶつけて菲瑪蘭敢を殺す。この話は、ビルマ語のマハーヤーマ物語、ヤーマ三種（ヨーダヤー・ザットーチー）の両版でも見られる。

ま と め

インドの古典文学作品「ラーマーヤナ」は、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、カンボジア、ラオス、ビルマ等、東南アジアの殆ど全域に伝播しているが、その分布範囲は中国の雲南省にまで広がっている。雲南省に伝わるラーマ物語「蘭嘎西賀」の内容を東南アジア諸語版ラーマ物語と比較してみると、それはタイのラーマキエンと部分的には共通性を示すものの、物語の骨格を成す基本的エピソードでは、ラオスのムオンシン版やビルマ語版ラーマ物語との間に強

い類似性を示す。特に、(1) 物語が「結びの章」で始まっている。(2) 登場人物の名称が三者間で共通している。(3) ラーヴァナはプラフマー神の子だとされている。(4) ラーヴァナ兄弟姉妹の間柄が共通している。(5) ラーヴァナは超能力をプラフマー神から付与されている。(6) シーターは焼身自殺した乙女の生れ変わりだとされている。(7) ジャータカ第540話サーマ・ジャータカが挿入されている。(8) ラーマ兄弟誕生の背景として王妃3人がバナナを食べるエピソードを共有している。(9) ラーマの追放期間が14年ではなく12年と設定されている。(10) シュールパナカーナカラ、ドウシャナが兄弟ではなく母子として扱われる。(11) シーターの身の回りに呪縛が設定され、その庇護が地母神に委ねられている。(12) ラーマの弟ラクシュマナは王城を出て以来12年間異性の顔を全く見ていないなどの特徴を共有している事実から判断すると、蘭嘎西賀はラオスのムオンシン版およびヤーマ・ウットウ、マハーヤーマ・ウットウ、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージン、ヤーマ・ヤガンというビルマ語五版と起源を共有している可能性が強いと言える。

参考文献

- 楊中祿責任編輯『蘭嘎西賀（泰族神話叙事長詩）』雲南人民出版社 1981
Aiyar, V.V.S: *Kamba Ramayana, a study.* Bombay 1987.
Aung Hpyo, U: *Rama Thagyin* (palm leaf manuscript in Burmese). 1886.
Bailey, H.W: *The Rama story in khotanese.* JAOS 54 1939.
Bizot, Francois: *Reamker, L'amour symbolique de Ram et Seta.* Paris 1989.
Balbir, Jagbans Kishore: *L'histoire de Rama en tibétain, D'après des manuscrits de Touen-Houang, édition du texte et traduction annotées.* Paris 1963.
Cadet, J.M: *The Ramakien, the Thai epic, illustrated with bas-reliefs of Wat Phra Jetubon.* Tokyo 1970.
Connor, J.P: *The Ramayana in Burma.* JBR 15 1925.
Courtillier, Gaston: *La légende de Rama et Sita, extraite du Ramayana de Valmiki.* Paris 1927.
Dhani Nivat: *The Rama Jataka, a Lao version of the story of Rama.* JSS 36 1946.
de Jong, J.W: *An old Tibetan version of the Ramayana.* T'oung Pao 58 1972.
Deydier, H: *Les origines et la naissance de Ravana dans le Ramayana laotien.* BEFEO 44 1951.
Deydier, H: *Ramayana in Laos.* JOR 22 1954.
Godakumbura, C.E: *The Ramayana, a version of Rama's story from Ceylon*

- . JRAS 1946.
- Grierson, G.A: *Kashmiri Ramayana*. Calcutta 1930.
- Grierson, G.A: *Sita forlorn, a specimen of the Kashmiri Ramayana*. BSOS 5 1928.
- Grierson, G.A: *The Bengali Ramayanas*. JRAS 1922.
- Griffith, R.T.H: *The Ramayana of Valmiki (translated into English verse)*. Benares 1915.
- Growse, F.S: *The Ramayana of Tulsi Das*. Allahabad 1978.
- Goldman, Robert P: *The Ramayana of Valmiki, an epic of ancient India*. Princeton University Press vol.I 1984, vol.II 19, vol. III 1991, vol. IV 1994.
- Hpo Sein, U: *Rama Thonmyo Zat Wutthu*. Rangoon 1935.
- Hooykaas, C: *Old Javanese Ramayana*. JOR 30 1960.
- Htoon, Hsaya: *Alaung Rama Thagyin*. Sittway 1905.
- Huber, Edouard: *Études Indochninoises 1. la légende du Ramayana en Annam*. BEFFO 5 1905.
- Jacob, Judith M: *Reamker (Ramakerti), the Cambodian version of the Ramayana*. London
- Juan R. Francisco: *Maharadia Lawana*. Quezon city 1969.
- Jumsai, M.L. Manich: *Ramayana (chef-d'oeuvre de la littérature Thaïe)*. Bangkok 1970.
- Juynboll, H.H: *Eene Episode uit het Oudindische Ramayana*. BIJDR 50 1899.
- Juynboll, H.H: *Vertaling van Sarga VII van het Odjavaansche Ramayana*. BIJDR 78 1922.
- Juynboll, H.H: *Vertaling van Sarga VII van het Odjavaansche Ramayana*. BIJDR 79 1923.
- Kapp, D.B: *The Episode of Ayi- and Mayi-Ravana in the oral Ramayana version of the Alu Kurumbas*. in "Ramayana and Ramayanas." 1991
- Kats, J: *Het Ramayana op Javaansche Tempel Reliefs*. Leiden 1925.
- Kate, J: *The Ramayana in Indonesia*. BSOS 4 1926-28.
- Kern, H: *Zang I-III van't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling*. BIJDRAGEN 73 1917.
- Kern, H: *Zang IV-V van't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling*. BIJDRAGEN
- Kern, H: *Zang VI van't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling*. BIJDRAGEN
- King Rama I of Siam: *Ramayana, Masterpiece of Thai Literature retold from the original version*. Bangkok 1977.
- Ku, U: *Pondaw Rama Pyazat*. Rangoon 1880.
- Lalou, Marcelle: *L'histoire de Rama en Tibetain*. JA 1936.
- Lutgendorf, F: *Another Ravana, Another Rama*. a paper for presentation at XIIth International Ramayana Conference in 1995.
- Makhan Lal Sen: *The Ramayana of Valmiki*. New Delhi 1976.
- Martini, F: *En marge du Ramayana cambodgien*. BEFEO 38 1938.
- Martini, F: *Note sur l'impreinte de Buddhisme dans la version cambodgienne du Ramayana*. JA 1952.
- Matics, Kathleen: *A History of Wat Phra Chetupon and its Buddha images*. Bangkok 1979.

- Maung Gyi, Dabein U: *Pondaw Rama Lekkhana Yodaya Zat Wutthu*. Rangoon 1910.
- Maxwell, W.E: *Sri Rama, a Malay fairy founded on the Ramayana*. JSBRAS 17 1886.
- Menon, A.G: *The Sanskrit and the Non-Sanskrit Traditions of Ramayana from the West Coast of India*. in "Ramayana and Ramayanas" edited, by M. Theil-Horstmann. Wiesbaden 1991
- Naidu, S. Shankar Raju: *A comparative study of Kamba Ramayana and Tulasi Ramayan*. Madras 1971.
- Narasimhachar, D.L: *The Jaina Ramayana*. Indian Historical Quarterly 1939.
- Nath, Rai Bhadur Lala Baij: *The Adhyatma Ramayana*. New Delhi 1979.
- OHNO Toru: *The Burmese versions of the Rama story and their peculiarities*. In Uta Gärtner & Jens Lorenz edit. Tradition & Modernity in Myanmar. Berlin 1994.
- Ottamu: *Loik Samoing Ram* (Manuscript written in Mon). 1834.
- Overbeck, H: *Hikayat Maharaja Ravana*. JRASMB 11 1933.
- Raghavan, V: *The Ramayana Tradition in Asia*. New Delhi 1980.
- Rai Saheb Dineshchandra Sen: *The Bengali Ramayana*. Calcutta 1987.
- Roorda van Eysinga, P.P: *Geschedenis van Sri Rama, beroemd Indisch Heroisch Dichtstuk*. Amsterdam 1843.
- Sarkar, Himansu Bhusan: *Indian Influences on the literature of Java and Bali*. Calcutta 1934.
- Sachchidanand Sahai: *Ramayana in Laos, a study in the Gvay Dvorahbi*. New Delhi 1976.
- Santosh N. Desai: *Hinduism in Thai Life*. Bombay 1980.
- Saveros Pou: *Ramakerti (XVI-XVII siècles)*, traduit et commente. Paris 1977.
- Saveros Pou: *Études sur le Ramkerti (XVI-XVII siècles)*. Paris 1977.
- Saveros Pou: *Ramakerti II (deuxième version du Ramayana Khmer)*, texte khmer, traduction et annotations. Paris 1982.
- Richman, Paula: *Many Ramayanas, the Diversity of a narrative Tradition in South Asia*. University of California Press 1991.
- Shellabear, W.G: *Hikayat Sri Rama, Introduction to the text of the M.S. in the Bodleian Library at Oxford*. JSBRAS 70 1917.
- Singaravelu, S: *A comparative study of the Sanskrit, Tamil, Thai and Malayan versions of the story of Rama*. JSS 56 1968.
- Singaravelu, S: *The episode of Maiyarab in the Thai Ramakien and its possible relationship to Tamil folklore*. JSS 74 1986.
- Soewito Santoso: *Ramayana Kakawin*. New Delhi 1980.
- Stutterheim, A.W: *Rama-Legenden und Rama-Reliefs in Indonesien*. Munchen 1925.
- Sundaram, P.S: *Kamba Ramayana, Bala Kandam* 1989, *Ayodhya Kandam* 1991, *Kishkindha Kandam* 1992, *Sundara Kandam* 1992, *Yuddha Kandam* I, II 1994, Thanjavur.
- Swami Satyananda Puri & Charoen Sarahiran: *The Ramakirti (Ramakien) or the Thai version of the Ramayana*. Bangkok 1940.

- The Government Lottery Office: *The Ramkien, mural paintings along the galleries of the Temple of the Emerald Buddha*. Bangkok 1981.
- Toe, U: *Rama Yagan*. vol.1 1965, vol.2 1933. Rangoon.
- Thein Han, U and U Khin Zaw: *Ramayana in Burmese Literature and Arts*. JBRS 59 1976.
- Utgikar, N. B: *The story of the Dasaratha Jataka and of the Ramayana*. JRAS 1924.
- Vaudeville, Charlotte: *Le Ramayan de Tulsi-Das. texte hindi traduite et commenté*. Paris 1997.
- Velder, Christian: *Der Kampf der Götter und Dämonen*. Stuttgart-Fellbach 1962.
- Vo Thu Tinh: *Phra Lak Phra Lam, le Ramayana lao*. Vientiane 1972.
- Vogel, J. Ph: *Het eerste Rama relief van Prambanan*. BIJDR 77 1921.
- Winstedt, R.L: *Hikayat Seri Rama*, JSBRAS 55 1909.
- Winternits, Moriz: *Geschichte der Indischen Literatur*. Band 1 Stuttgart 1909.
- Ziesenis, Alexander: *The Rama Saga in Malaysia*. Singapore 1963.
- Zoetmulder; *Kalangwan, a Survey of old Javanese Literature*. The Hague 1974.
- Zvelebil, K.V: *Tamil Literature*. Leiden Koeln 1975.
- 阿部知二『ヴァールミーキ、ラーマーヤナ』河出世界文学大系2 河出書房新社 1980
 ヴァールミーキ、岩本裕訳『ラーマヤナ』(1) 東洋文庫376、(2) 441、平凡社 1980、1985
- 宇戸清治「北部タイ地方のラーマ伝説ー『プロンマチャック物語』ー」『東京外国語大学論集』第47号 1993 pp.270-300.
- 宇戸清治「『劇詞ラーマキエン』の性格とタイ王制イデオロギー」『田中忠治先生退官記念論文集』1994
- 大野 徹「東南アジアのラーマヤナ (1) インドネシア、マレーシア、フィリピンの伝承」『大阪外国語大学アジア学論叢』第3号 1993 pp.37-70
- 大野 徹「東南アジアのラーマヤナ (2) タイ、カンボジア、ラオスの伝承」『大阪外国語大学アジア学論叢』第4号 1994 pp. 255-308
- 大野 徹「東南アジアのラーマヤナ (3) ミャンマーの伝承」『大阪外国語大学アジア学論叢』第5号 1995 pp. 139-186
- 大野 徹「蘭嘎西賀」と東南アジア版ラーマ物語』『金子量重先生古希記念論集・アジアの民族造形文化』1996 pp. 78~89

Ramayana Legends prevailed in Southeast Asia (4)

—Lanka Xiho, the Tai Lu version of Rama story—

OHNO Toru

The fact that Tai Lu people living mainly in the Xishuangbanna district, Yunan province, China, possess their own Rama story called “Lanka Xiho”, has been introduced for the first time in Japan by the late professor IWAMOTO Hiroshi in his book entitled “Ramayana” published by Heibonsha, Tokyo, 1985 in pp-338-352. It is not so difficult for us to know the plot of the Tai Lu version of Rama story “Lanka Xiho”, since it has been translated into Chinese and published by Yunnan Peoples Publishing Co, in 1981. It is obvious that the title “Lanka Xiho” denotes the Ten Heads of Lanka.

On a comparative study with other Southeast Asian versions of Rama story, the following are found to be the prominent features of Lanka Xiho.

I. The story commencing with Uttara Kānda

The most noteworthy feature of Lanka Xiho is that it commences with Uttara Kānda, the Last Book of Vālmīki Rāmāyana. In the beginning of Lanka Xiho can be seen the detailed accounts of Pengmajia (Rāvana), such as genealogy of Pengmajia, the naissance of Pengmajia, attainment of his invulnerability, practices of his polygamy.

It draws our attention to the fact that the early history of Ravana is dealt with in the first chapter in almost all the Southeast Asian versions of Rama story such as Serat Kanda (Java), Hikayat Sri Rama (Malay),

Maha Ladia Lawana (Philippines), Phra Lak Phra Lam (Vientiane), Phralak Phralam Phommachak (Muongsing), Rama Wutthu (Burma), Rama Thagyin (Burma), and Rama Yagan (Burma).

II. The names corresponding to those of Laos and of Burmese versions

The names of the chief characters in Lanka Xiho are not necessarily correspondent with those of Vālmīki Rāmāyana. It is interesting to note that the names of the main characters are in general similar to those found in Laos (Muongsing version) or Burmese version of Rama story. The following appear to be noteworthy.

Rāvaṇa (Sanskrit) = Pengmajia (Tai Lu) = Phommachak (Laos)

Rāma (Sanskrit) = Langma (Tai Lu) = Lamma (Laos)

Vibhīṣaṇa (Sanskrit) = Biyasha (Tai Lu) = Piyassa (Laos)

Kumbhakarṇa (Sanskrit) = Gunnaba (Tai Lu) = Khannapa (Laos)

Vāli (Sanskrit) = Balimo (Tai Lu) = Parimok (Laos)

Sugrīva (Sanskrit) = Galin (Tai Lu) = Kalling (Laos)

Bharata (Sanskrit) = Palada (Tai Lu) = Phalata (Laos)

Janaka (Sanskrit) = Gannaga (Tai Lu) = Kannaka (Laos)

Daśaratha (Sanskrit) = Tadalata (Tai Lu) = Thattatatha (Laos) =

Dathrattha (Burmese)

Lakṣmaṇa (Sanskrit) = Lagana (Tai Lu) = Lakkhana (Laos) = Lekkhana

(Burmese)

Śūrpaṇakhā (Sanskrit) = Dalihada (Tai Lu) = Tharikhata (Laos) = Trigata

(Burmese)

Indrajit (Sanskrit) = Indaxida (Tai Lu) = Inthasitha (Laos) = Endaseitta

(Burmese)

The forms expressed by romanization of Chinese scripts do not represent the phonological value. It must be taken into consideration that the voiced letters g-, d-, b-, in romanisation denote in fact the voiceless

non-aspirated consonants and the voiceless letters k-, t-, p-, in romanization represent the voiceless aspirated consonants kh-, th-, ph-. For example, therefore, Tadalata in Tai Lu should be understood as Thatalatha and Dalihada as Talihata.

It becomes evident that the names of the main characters in Lanka Xiho are similar or at least identical with those in Muongsing version of Laos in general and also with those in Burmese versions of Rama story in some cases. So far as the names of the chief characters in Lanka Xiho are concerned, Lanka Xiho run closely parallel with Muongsing version of Laos and likewise with Burmese versions.

III. Pengmajia born as Mahā Brahmā's son

According to the description of Uttara Kānda of Vālmīki Rāmāyana, Rāvana is the first of the four children born of the Rākṣasi Kaikasi to the sage Viśravā. Since the sage Viśrava is the grandson of Brahmā, it is evident that Rāvana is a great grandson of Brahmā.

As regards the relationship between Mahā Brahmā and Rāvana, the Southeast Asian versions of Rama story state that Ravana is (a) Maha Brahma's Grandson (Serat Kanda of Java and Hikayat Sri Rama of Malay) (b) Maha Brahma's Son (Muongsing version of Laos and Rama Wutthu of Burma) and (c) the reincarnation of Maha Brahma himself (Vientiane version of Laos).

Lanka Xiho mentions Pengmajia as Maha Brahma's Son. From the standpoint of Ravana's relationship, Lanka Xiho is identical with Muongsing version of Laos and six versions of Burmese Rama story.

IV. The birth episode of Pengmajia

Lanka Xiho describes that Guditila, a daughter of Ba Lanba, The Raksasa king of Lanka, practices austerities in the forest of

Imaban (Himalaya) for seven months. Having acknowledged her devotion, Mahapeng (Maha Brahma) descends from the heaven to the earth. Guditila offers three sprays of Mango to him, at first a spray bearing ten fruits, secondly a spray bearing an enormous fruit and at last a spray bearing a fragrant fruit. Mahapeng strokes her belly three times and leaves her saying that she will deliver three children. Guditila becomes pregnant and gives birth to three children. The first born child possesses ten head, four above centre and three above each shoulder. He is named Pengmajia (Brahma Cakra), since his father is Mahapeng.

The mango motif can be also seen in Muongsing version of Laos and three versions of Burmese Rama story, viz. Rama Wutthu, Maha Rama Wutthu, Rama Thagyin and Alaung Rama Thagyin.

V. Pengmajia's invincibility bestowed by his father

Lanka Xiho states that Pengmajia along with his two brothers practise asceticism for five years for the purpose of meeting his father. Mahapeng appears in front of his children and grants boons to them. Pengmajia requests invulnerability and is endowed with it with the exception of the righteous prince, the divine bow called "Ashajian" (Addha Canda) and the white monkey. He is also permitted to take his soul out of his body and put it into a divine bow called "Saizaigong", which was bestowed him by Mahapeng. The second son "Gunnaba" is granted a right to sleep for twelve years without interruption. The third son "Biyasha" is endowed with a divine book and special ability of prophecy.

The similar episode can also be found in Muongsing version of Laos and four versions of Burmese Rama story. Kampa Ramayana and Hikayat Sri Rama of Malay depict the motif of Ravana's severe austerities with cutting his heads one by one for nine thousand years and eventual attainment of his invulnerability. Nothing can be said about it in Lanka Xiho.

VI. Nang Xila's revival under the "Naliben" tree

Lanka Xiho relates that a charming maiden named Nang Xila practises asceticism under the tree "Naliben". Pengmajia is captivated with her beauty and wooed her ardently. Having found unable to escape from Pengamajia's disturbance, Nang Xila jumps into fire and is burnt to death cursing that Pengmajia shall be destroyed by her in next birth.

A similar episode can be seen both in Vālmīki and Kampan Ramayanas. In his Uttara Kāṇḍa, Vālmīki narrates that Rāvāṇa saw a beautiful girl named Vedavati, engaging in penance. Being smitten with her beauty, Rāvāṇa forcibly seized her by hair. Vedavati kindled a fire to burn herself for that insult. She will rise repeatedly like a flame of fire from the ploughed field. Kampa also gives us an account of Vibhīṣana recommending to his brother, Ravana, that Sita was the incarnation of a woman who had fallen into the fire swearing to destroy Ravana in her next birth as a revenge for his attempt to violate her.

The episode of committing suicide and the revival or reincarnation of the previous being of Sita is also described in Muongsing version of Laos, Kashmir Ramayana and Jaina Ramayana.

VII. Forlorn Xila

It is worth mentioning here that almost all the Southeast Asian versions of Rama story deal with Forlorn Sita. Lanka Xiho gives account of the episode that the Naliben tree once reduced to ashes together with Nang Xila sprouts next spring. Nang Xila also returns to life under the tree. Pengmajia orders to his retinue to kill her lest her curse should be effective. Nang Xila is put into a coffin decorated with gold and lacquer and casts into a river so that she will be drowned. The coffin is conveyed by waves to the riverbank of Ganaga kingdom. The Ganaga king finds the coffin radiating dazzling brightness. The king salvages the coffin and

discovers a female baby sleeping inside. He Brings up her as his foster daughter.

A similar episode is narrated also in Muongsing version of Laos. An episode of drifting baby is widely spread among the Southeast Asian versions of Rama story such as Serat Kanda(Java), Hikayat Sri Rama(Malay), Ramakien(Thai), Luangphrabang version and Vientiane version(Laos), Maha Rama Wutthu and Rama Wutthu(Burma).

VIII. The Incarnation of Bodhisattva as Zhao Langma(Rama)

Zhao Langma's precedent status is probably one of the most outstanding features peculiar to Lanka Xiho. Rama is said to have been depicted in the original Vālmīki as a human hero of Ikshvāku-Kshatrya lineage with superhuman abilities. He is in Kampa Ramayana recognized as an incarnation of Vishnu in Human form.

Meanwhile, Lanka Xiho mentions Zhao Langma as the Bodhisattva, viz. the future Buddha. It is quite significant that both the Vientiane version of Laos and "Rama Jataka" of Northeastern Thai are composed of a complete style of Jātaka tale with prologue and epilogu, where the Buddha confesses himself as Rama in his preceding life. As regards to the main characters in them, Ravana is narrated as the reincarnation of Devadatta, Dasaratha as the reincarnation of Suddhodhana, Sita as Upparavaruna and Lakshmana as Ananda.

IX. The incorporation of Sāmā Jātaka into Lanka Xiho

Lanka Xiho contains an account of king Tadalata's shooting an arrow against a young hermit whom he misconceived as if he were a deer drinking water in the stream. This is considered to be an incorporation of Sāma Jātaka into Lanka Xiho.

A similar eepisode is dealt with also in Burmese versions of Rama

story. The life of the hermit is saved as the king tried his best to rescue in Lanka Xiho. meanwhile, the young hermit, in Burmese version likewise in those of Vālmīki, Kampan and Tulsī Dās Ramayanas, loses his life by an effect of violent poison of his arrow.

X. Zhao Langma's birth story

According to the descriptions of Vālmīki and Kampan Ramayanas, the king Daśaratha pines for the birth of a son. He performs a sacrifice for obtaining a son. A hugh dark figure rises from the sacrificial flame, holding in his both hands a large golden cup containning celestial rice boiled with sugar and milk. Daśaratha distributes the divine food among his three queens. Rama is born to Kausalyā, Lakṣmaṇa and Śatrughna to Sumitrā and Bharata to Kaikeyī.

Lanka Xiho describes Zhao Langma's birth story in connection with king Tadalata's mischievous conduct against a young hermit whom he shots an arrow. The hermit recovered from his serious injury by virtue of king's care, grants a boon to the king. Tadalata asks him the method to get his successor. The hermit gives him two plantains saying that the bananas should be given to his consorts. The king hands over two bananas to two queens: one to the first queen Nang Sugandi and the other to the third queen Nang Jiexi. Both queens divide their bananas into halves and deliver to the second queen, Nang Sumida. The three queens become pregnant concurrently and give birth to four children. Prince Zhao Langma is born of Nang Sugandi, Palada of Nang Jiexi, Lagana and Shadaluga are born of Nang Sumida as twin brothers.

An account of partaking plantains by Dasaratha's three consorts is narrated also in four Burmese versions of Rama story.

XI. Twelve years as the period of the banishment of Zhao Langma

It is generally known that the period of Rama's exile is fourteen years, all in Vālmīki, Kampan, Adhyātma and Tulsī Dās Ramayanas. The period of the banishment of Rama is stated as fourteen years in Thai Ramakien and Khmer Reamker, too.

Lanka Xiho describes that as the queen Nang Jiexi raises an objection to king's decision to have Zhao langma succeed him. She demands her son Palada's coronation and Zhao Langma's exile into a forest for twelve years. The period twelve years of banishment in Lanka Xiho is identical with that in Muongsing version and six versions of Burmese Rama story. The period of twelve years tallies with the descriptions of Daśaratha Jātaka and Jaina version of Ramayana, too.

XII. Consanguineous relationship between Dalihada and Xieda, Dulasha

Vālmīki narrates Śūrpanakhā as Rāvaṇa's sister. She has four other brothers, namely Kumbhakarṇa, Vibhīshana, Khara and Dūṣaṇa. Kampa also describes Śūrpanakhā as Rāvana's younger sister and Dūṣaṇa is Khara's younger brother. Lanka Xiho states that Xieda(Khara) and Dulasha(Dushana) are Dalihada's children. Dalihada is a younger sister of Ba Lamba, the former king of Lanka. She is granted by Pengmajia, that she has a full authority over all the living creatures with two legs and four legs. Having found Zhao Langma and his two companions entering her domain, Dalihada with her two children launch to assault upon three human beings as their foods, since they are permitted to seize any invader to their realm. Zhao Langma and Lagana slay Dalihada's children with their sharp arrows.

The Rama Wutthu of Burma mentions that Trigatha(Śūrpanakhā) has two sons named Khar and Dutta. Muongsing Version of Laos relates that Khara and Dusha are Trigatha's daughters.

XIII. Dalihada's transformation into a golden hind

Lanka Xiho describes that having seen slayed her children, Dalihada takes flight to Lanka and reports with sorrow to Pengmajia that her two children were killed by two human beings accompanying an extraordinary beautiful woman. She requests Pengmajia to abduct the woman in order to take revenge for her children's death. Since Pengmajia realizes that the three human beings are Zhao Langma and his wife Nang Xila together with his brother Lagana, he hesitates to comply with the request of Dalihada. Being aware of Pengmajia's reluctant attitude, Dalihada suggests him that she transforms herself into a golden hind in order to entice Zhao Langma and Lagana to the place far from Nang Xila. Pengmajia consents to her suggestion and goes to the forest accompanied with her. Dalihada assumes the form of a beautiful hind and appears in front of Nang Xila. Being attracted the hind, she asks Zhao Langma to capture it for her. Zhao Langma chases the hind and eventually shoots it with his arrow.

A similar episode can be found also in Muongsing version of Laos and seven versions of Burmese Rama story.

XIV. The magic circle drawn around Nang Xila

Lanka Xiho gives an account of a magic circle drawn by Lagana around Nang Xila. Having been shot by Zhao Langma with his arrow, Dalihada screams imitating Zhao Langma's voice. It sounds to Nang Xila as if it were Zhao Langma's voice calling for rescue. Nang Xila urges Lagana to go for his elder brother's help. Before his departure, Lagana draws with his arrow a magic circle around Nang Xila and entrusts her protection to the Goddess of the Earth. He warns Nang Xila not to go beyond it whatever be happened. Immediately after Lagana's departure, appears Pengmajia to seize Nang Xila. Since the Goddess of the Earth

takes a firm hold of Nang Xila's legs, she stands there as firm as a rock. Having seen Lagana's arrival, Zhao Langma rebukes him for his abandonment of Nang Xila's protection and stamps the ground violently. Feeling to have been insulted by Zhao Langma, the Goddess of the Earth loosens holding Xila's legs. At that moment, disappears the magic circle around Nang Xila. Pengamajia can seize Nang Xila with ease and carries her to Lanka with his flying chariot, fusaledi(Puṣpaka).

The descriptions of the magic circle around Sita are widely found in the Southeast Asian versions of Rama story such as Serat Kanda(Java), Hikayat Sri Rama(Malay) and seven versions of Burmese Rama story. Muongsing version of Laos alone deals with an account of Sita's trust to the Goddess of the Earth, Nang Thorani, like that of Lanka Xiho.

XV. Zhao Langma's encounter with Galin(Sugriva)

It is Hanuman, both in Vālmīki and Kampan Ramayanas, who attempts at first to talk with Rāma and Lakṣmaṇa. He assumes the guise of a brahman youth and inquires who they are.

Lanka Xiho narrates that having searched Nang Xila, Zhao Langma and Lagana come to a cool shade of a big tree in order to take rest. Zhao Langma soon begins to sleep in the lap of Lagana. Lagana takes off his upper garment and covers the exposed part of Zhao Langma's body lest mosquitoes and horseflies should assault on him. A gigantic gatfly assaults Lagana. Blood begins to stream from his naked back. Bearing with a dreadful pain, Lagana never move his thighs, being afraid of Zhao Langma's sudden awakening. Having been deeply impressed by the benevolent attitude of Lagana toward his brother, Galin, sitting on the top of the tree, begins to weep. His tears drop down in torrent on Zhao Langma's breast and awake him.

A similar episode can be observed also in Burmese versions. Though

Alaung Rama Thagyin alone describes the gatfly as an ordinary size, Rama Thagyin, Rama Yagan, Maha Rama Wutthu and Rama Wutthu emphasize that the gatfly is as big as a cow.

XVII. The distances to be able to jump by monkey military officers

Lanka Xiho mentions the jumping abilities of the monkey officers. Lanka island is three thousand Yue(Yojana) far from the continent. Galin, the general commander of monkey army, inquires to each officer how long they will be able to jump. Lata replies that he can jump 30 yue. Kamuda 40 yue, Manila 50 yue, Mami 60 yue, Wangguo 70 yue and even the monkey monarch Galin 70 yue. Nobody can jump over the ocean. It is eventually found that Anuman, the son of the God of Wind, Pawenna, has an ability to jump over three thousand yue.

The account of the jumping abilities of monkey officers is described also in three versions of Burmese Rama story. Rama Wutthu and Maha Rama Wutthu depict the distance between the continent and Lanka island as one hundred Yojanas. The Jumping distance of Nala is 10 Yojana, Nila 20, Kamuka 40, Zambuman 80. Hanuman is recommended by Zambuman as the owner of the supernatural power. Rama Thagyin relates also the distance from the main land to Lanka as one hundred Yojanas. It becomes clear that the jumping distance of Ngamoutta is 40 Yojanas, Wunshwe 50, Mekkata Nayeda 60, Nalane 70, Anupata, Anuhita and Anukhana 80, and Hanuman 90 Yojanas. Zambuman reveals that Hanuman is the son of the God of Wind and possesses the supernatural ability. Vālmiki also narrates the jumping abilities of each Vanāras. Jambavan tells Rāma with regard to the birth story of Hanumān and his strength and invincibility.

XVIII. Nang Xila's hairs consigned to Anuman

It is found, in Vālmīki, that Rāma gives a ring to Hanumān as an

evidence by which Sita will recognize him as trustworthy emissary from Rama. On return journey, Hanumān brings a headgear of Sītā back to Rāma.

Lanka Xiho states that having arrived at Lanka, Anuman meets Nang Xila and hands Zhao Langma's ring to her as a token of Zhao Langma's emissary. On return Journey, he carries seven hairs of Nang Xila away to Zhao Langma as the evidence of Xila in life. A similar episode can be found also in four versions of Burmese Rama story. The number of hairs which Hanuman entursted is, however, 7 both in Rama Wutthu and Maha Rama Wutthu, and 10 in Alaung Rama Thagyin.

XIII. Lagana by no means looking at the face of any woman during past twelve years

Both Vālmīki and Kampan Ramayanas mention that Indrajit, Rāvaṇa's son, is an expert in the employment of the black art and invincible. He falls ultimately a headless corpse by an arrow from Lakṣmaṇa's bow.

According to the descriptions of Lanka Xiho, the most fearful ability of Indaxida is his miraculous power of becoming invisible from human sight. Nobody can see him except the one who have not seen any woman's face at all during past twelve years. Lagana is proved to have been such a person. He finds out the figure of Indaxida who retreats into a cloud. Zhao Langma shoots his arrow toward the direction where Lagana points with his index finger. Having been severed his head from his torso, Indaxita falls to the ground. A similar episode can be seen also in five versions of Burmese Rama story, Mon version "Loik Samoing Ram" and the Bengali Ramayana.

Conclusion

On a comparative study of Lanka Xiho with the Southeast Asian versions of Rama story, the following features attract our attention. (1) the story commencing with Uttara Kāṇḍa, (2) the names of the main characters in Lanka Xiho corresponding to those in Laos and Burmese versions, (3) Rāvana born as Mahā Brahmā's Son, (4) Rāvana's birth story, (5) Ravana's invincibility bestowed by Maha Brahma, (6) Sītā's revival or reincarnation, (7) forlorn Sita, (8) Rama's previous status as the Bodhisattva, (9) the incorporation of Sāma Jātaka, (10) Ravana's naissance, (11) twelve years as the period of Rama's banishment, (12) consanguineous relationship between Šūrpanakhā and Khara, Dushana, (13) Šūrpanakhā's transformation into a golden hind, (14) the magic circle drawn around Sita, (15) Rama's encounter with Sugriva, (16) the distance to be able to jump by monkey military officers, (17) Sita's hairs consigned to Hanumān, (18) Lakṣmaṇa by no means looking at any woman's face for twelve years.

It is evident from the salient features I have stated above that Lanka Xiho has strong affinity with Muongsing version and six versions of Burmese Rama story. It may suggest that these three Rama stories from three countries (Laos, Burma and Yunnan) have derived from a single source.